

北辰會雜誌

136

第四高等學校文藝部

北  
辰  
會  
雜  
誌

136

第四高等學校文藝部

北辰會雜誌第百三十六號目次

創作

始祖鳥  
純情

家門夫治雄  
小島正

短歌

へルン舊居  
習作

犬丸秀穂  
佐口透

詩

玩具箱

松本治助

俳句

雜詠

森本壽大郎

隨想

謡曲雜考

佐口透

主觀と客觀

西林忠俊

翻譯

幻滅の日

佐口透

後記

創

作

## 始祖鳥

家門夫治雄

一本の年老いた櫟の樹のもとで屈まり、故もなく頼杖をついて、かなり長いあひだ私はまはりに目をやつてゐた。榊、檜、岩つゝじ、その他ちつちやな灌木や、笹の群が徒にいぢけた觸手をからみあはせながらも、何かしら混然とした和やかさをそこからかもし出してゐるのだ。

すべてがまだ見ぬ春の氣分に酔つてゐた。南から微風がやつてくる、するともう若い芽ざしはそれにうなづき始める。背後では、白聖の醫王の山容がそれを拒み、脅かしてゐるのに。けれど、やがての季節にはこの地特有の蘭やつぼ草が簇り、名の知れぬ小枝が水溜りのうへに白い花を差したすだらう。時折りは退屈しのぎに、野茨や藤の卷蔓にいぢめつけられた山百合をおこしてやつてもいゝのだ。

曾て愛し、愛されたものゝなかで、久方振りに息することは何とした歡びであらうか。忘れたいとは常づね希んでゐて、いつとはなしに失ひかけてゐる微少な事ごとにも、一年のうち僅か一週間の滞在が、またも新しい綠素を注ぎいれてくれるのだ。匂ひと、彩りと、音と、怯れと、苦しみと、物悲しさ。まつたくなのだ。物心つく頃、既にあの惱み多い挑發の感覺をうけとつた時ぶん、私は此處の杉苔の上に、最初の隠れ場を探しあてゝゐた。幼い子供のあや

まちに似た甘すつばい快樂、それ以後、幾つもの人生が、私の前に大きな山波となつてあらはれ、忽ちのうちにまた轟音を立て、崩壊し去つたのだ。たとへばこの櫟の樹の歴史だ。なめらかな幹はだにたゞひとつの隆起、それは私が「激情」に始めて心うたれた、自分の力を試すために切り込んだ、言はゞ痛ましい刀痕なのだ。年月が経つてすつかり癒着した。そして今、恐らくはこの樹の最も固い部分となりおぼせたのだ。

ひよつとして、烈風が押しよせ、終夜この巨木が唸りつゞけることもあるだらう。海と山とを越えてきた逞ましい嵐がいきなりぶつかる。簇葉との接吻、愛撫、叫喚、怒號、狂奔、その重みに呻めきながらぶつと耐へる樹幹。一切は魂切の消耗にまで驅りたてられる恵みの歌なのだ。明るいつ時に見えないものが吹きつける。緑に燃える部屋、そしてきまつて不思議にマンドリンなのだ。ぢかに見る少女の瞳は一個のまつたき肉体として生き、なかば待設け、なかば反撥する。情緒的な處作はほろび、たゞ荒削りの争ひのみが。

けれど、夜のひきあけを待つまでもなく、嵐は鎮まつてゐる。片手を彼女の肩にさし伸べた姿勢で黄ばんだ雲のうつりゆくさまを彼女のまなこから読みといた日も私は黙つてゐた。生けるものとはない生活を神に捧げ、虚ろに樂器は挽歌のひと節をかなでてゐた。直に、陽ざしは落ち散つた樹葉の屍を温め、谿川の流れば秘めやかに彼女らを第二の世界に送りとゞけてやるだらう。

いま、かぜは殆んど死んでゐた。いよいよあの堪へがたい黄昏がやつてきたのだつた。一日にいちどは必ずおこる風景停頓の現象、胸苦しく澱みつもつた、けれど限らない奥行きをもつ

た空氣が、徐々にクリイム色の漣に融けこみ、ひたすら暗黒のとばりのなかに没し去らうとするひととき、我知らずかうして私は深い幻影の一塊にとらはれてゐた。

とはいへ、すつかり過去と同じな譯ではない。杉の木立を通してかなたにうづくまる丘。水遊びに、小松の植替へに、薄の影でのかくれんぼうに、私たちの幼年時代の大部分を占めた同じ場所はいま明らかに平地に禿つてゐた。ほんの昨日のことだつた。

何か、いらだたしげに、頻りに歛をうち振ふ人物が私をこゝに惹いたのだ。懐しい思ひ出を破壊しつゝあるこの男に私はもういきどほりで一杯だつた。彼は顔をあげた。見覺えあつた。それ所か、多分卒業記念の寫真にとなりあはせた人だつた。驚きと、慎しみ深さをとりまぜて彼は迷つてしまつた。

「へえ、開墾地なので、畑になるのです。畑に」

「やはりうちの仕事ですな」

「へえ、お屋敷の」

「僕たちがこゝで一緒に遊んだことを憶えてゐませんか」

「またも心のすゝまない、困つたやうな面持ちだつた。」

「ところが、あなた、十年経つてまさあ、あれからねえ、十年、いや、もつともかも知れんです。ともかくわつしらは喰はねばならんです。ところが……いや、餓鬼やら女房やら、わつしらの子供のじぶんのことなんぞ、まるであの世の夢みたいもんで」

「不耕地さへあるのに、開墾するつてのは、いつたい兄貴は支拂つてくれるのかさ」

「いただけるんぢやありません。借金の利息がはりに働くんできて、そりや、おかみの方が奨励金つてやつがお這入りになるんでせう」

「村の人たちはどう言つてます。兄貴のやりかたを」

「別に、どうとも」

「言ひかたがないつてわけですな」

彼は血の色をのぼらせて、兄のためにか私のためにか恥ぢた。それから又、慌しい身振りで赤つちを掘りかへしにかゝつた。

もはや草花にふちどられた小徑は跡方もなく消えうせてゐた。むき出しの瘦せた地づらは見た目には乳白色の天に對して妖しく怒つた風だつた。私はまたかうも考へた。新しい墓の下地ができたのだと、甚しく即物的な問題でも私はかう飾りたてるくせなのだ。

そのあひだ、ちよつとのま、私は打ちのめされた。併し、夕ぐれどきの靄が谷間に渦をまいて降り始めると、何かがまたも私を遠方に連れだすのだ。

茫々のなかで花の像がほの見えた。山峯が、森林が、裸の土地も、檜の樹も生あたたかい水分にひたつてゐた。

私は一帯をみはらすために峠のほうにあるいていつた。

もやは尙もこめてきた。何處もかもが隣りあひ、つらなりあつた。芳ばしい野生の草の匂が足元で漂つてゐた。

ひと所でかたまりになつた風景が、次の瞬間には動きだし、しふしふと流れていつた。

太陽はもうかくれ、たゞ取りのこされた日光のみが闇と霧とに最後の闘をいどんでゐた。まさに一日の臨終だつた。

そのとき、不意に奇妙な鳥の啼きごゑをきいたやうな気がした。思ひ做しばかりでなく、私は本能的にうしろをふりかへつた。けれどそれは檜の木にまつはる傳説の音とは違つて、もつと濁つた、だみた、そして現實的なものだつた。その聲を耳にしたものは村の帝王なのだ、古木に棲む物語の鳥について私たちはさう教へられてゐた。二度、三度と長びく。見つけだした、山腹をゆるやかに匍ひめぐる國道——そこからぼんやりした一團のあかるみが浮びあがつてきた。

私は走つた。豫感があつた。いくら進んでもちつとも効果が無いやうなもどかしさに悶えながら草のうへを急いだ。いくどか石ころが私の足を奪ひ、ぬかるみが汚し、棘が引掻いた。やつと大きな通りへ辿りついたとき心臓の動悸をとめるのにたいへんだつた。

忠魂碑の傍で、濃いもやにつゝまれた自動車は立往生だつた。エンジンが吐息をついたり喘いだりしてゐた。

車ぢうが幾筋もの水のしたたりを浴びてゐた。

愁ひに充ちた顔と顔がゆらいだ。瞬間驚きがきた。

「まあお兄さんだわ、お兄さんだわ」

夜になつてもやは霽れた。月がのぼつて家々を照した。村は騒がしかつた。二里ほど離れた町

で昔からのしきたりの春まつりがあるのを私は覚えてゐた。

私は舊い朱塗りの馬車を庭先きの東屋から導きだした。展根も轡も模様もひびがはいつてゐた。鼠の嚙みあとへ埃がたまつてゐた。蜘蛛の巣がないか、拂つてみて私は櫻子と百重とをさきに乗せた。

彼女らはうつとりとなつてゐた。ひるまの旅ですこし疲れ氣味だつた。

私はむかしの手つきでたづなを取つた。

哀れな馬は驅けた。岩かどの多い道では絶えずぎしぎしと車が悲鳴をあげた。

私はふと「にんじん」の一場面に自分を移し考へてみた。けれど事情は全く異つてゐた。私の思出はいつでも甘やかしに溺れてゐる。そこを逃げ抜けることは私には不可能なのだ。

所々で人々を追ひこした。老人や子供が道ばたへよけた。若い者たちは無暗に大きな聲で、何か猥らな歌をうたつてゐた。そのなかから昨日の友達をきゝわけることができた。

歩みはずつと遅くなつたと思ふとまつくらな森のなかだつた。どこかでひたひたと瀑の音がしてゐた。ひかりは射してこなかつた。悪魔のさゝやきを耳にしないでこゝを通りすぎることは難かしかつた。その間ぢう、彼女らはびつたり體を寄せあひながら前をみつめてゐた。

するともう月あかりのなかへ躍りだした。馬車は數十米の斷崖のうへを走つていつた。

夜鳥が掠めた。

「いつたい、兄貴のお許しがめあてだつたのから」

「それはさうよ」

佯しげな櫻子の聲がそれに應へた。

「今になつて？」

「いつだつて」

「母が死んだことは知つてゐたんだらう」

「えゝ」

彼女は顔をかたく、首を垂れ、眼を落した。

「分らないなあ」

「お兄さんには分らないの」

十七と十四のこの姉妹は、幼い頃の慣はしで、いまだに兄さんと、私にとつては何か擦つたい呼びかたをすけるけれど、實は私の姪なのだ。ふたりの父、つまり私の一番うへの兄の死の當座、母と一緒に私たちの田舎へ逃げこんで見れば、彼女らの身はすでに私生兒の刻印を帯びてゐた。現在の兄も私も、亡兄とは異腹だから、私たちの母親は心弱い父を説きふせて、彼女らを若干の金額で遠のけることに心を碎いた。櫻子の女學校入學の障りにもなるからせめて庶子にでもといふ幾度かの要求もうち棄てられたまゝだつた。彼女らに取つて鬼と化し果てた私たちの母親もほんの先月葬られたばかりなのだ。

「兄貴のほうはもつとひどくなつた。村の有様がどんなだか、高利、差押へ、苦役、まるで目茶なんだ。子供達の顔の蒼白さと云つたら、僕は始めてみたよ。それから、女たちのまびき、もつと悪いこと。それで政府の補助金や救済費はそつくり兄貴のふところへ轉りこむんだ」。

言ひながら私は火照つてしまつた。

「僕の學資だつて、勿論兄貴のもんぢやないんだ。僕の畠も、水田も、山も、森もだん／＼兄貴のものになつていく。どうだ、その明細書が月々のし送りと一緒に僕の下宿へとゞくと云つた整然さなのだ」

私は無理に微笑まうとつとめた。私は彼女の手を採り、吃りながら言つた。

「許しておくれ、あいつは僕の兄貴なのだ」

「まあ」

彼女は目を睜り、やがて潤ひに輝いた。

「僕はまだいい……」

「もう仰言らないで」

両手が耳をふたいだ。

湖の光りが山のあひまから反射してきた。私は馬をのろくした。語るのに何といふ暗だらう。空も月も澄んでゐた。

附近の村から區々に、また一せいに重い人影がうごいてきた。犬が吠えた。

百重はいつか睡りにおちてゐた。脚を姉の膝につけて、半ば安らかに未來の花を夢み、なかば現實のいたでに苦しみつゝ。さうした寢がほ、特に圓い眉毛とふくらんだ頬とは誤りなく亡きひとのそれだつた。

「妾たち、今まで、どうして暮したと思つて？」



「まさか、皮肉ではあるまいね」

「お兄さんに皮肉なんか通じないわ、たゞありのまゝ、だつて大概、想像つく筈よ」百重の頭を冷えてきた外氣からまもりながら、「あたしたち嫌なの、えゝ死ぬ程いやだわ、その男のひとはもう六十ちかくのお年なの、そんなお爺さんとお母さんを並べてみてあたしたちがどんな氣持になるか、けど妾お母さんを責めないわ、どんなにもがいてみたつて一本立ではやつていけないんですもの、責められないの、お母さんだつてつらいに違ひないんだし、だいいち、口をきけばおたがひ悲しくなるだけなのよ」

悲痛なものと、峻厳なものとが諦らめの表情にまぎつた。私はわざと氣樂に見えるやうに顔を外にそらした。そしてあらぬ世界に氣を配る振りをした。

「悲しがるんだつて」私は到頭話した。「それでは、この美しい景觀も目にはいらぬみたいぢやないか、あの事がある鳥渡まへ、こんな静かな夜にはおまへのお父さんはいつも座敷に坐つて身じろぎもせず深い考へに耽つたり、無心に煙草をくゆらしたりしてゐたんだよ。できれば氣まゝに同じ處を往つたり來たりして何かを呟いてゐた。そして雨の日にはきまつて女のひとに手紙を書いたものだつた。誰でもがそれを生垣から覗くことができたんだ。封筒を村の郵便局まで直接持つていくのが僕の役目なのだ。若旦那は狂つておいでになる。村ぢうにさう云ふ噂さが擴つてゐた。死骸が瀬戸内海から浮びあがつたのはそれから直ぐだつたんだ。

「女のかたもご一緒だつたの」

「知らなかつたのから」

「ちつとも」

「實際はさうだつた」

彼女は考へ込んだ。肩が震へた。突然顔をあげた。そしてしばらく放心の状態だつた。うつろな瞞めやうだつた。それからまたも顛へがしのび聲と共にきた。

「不幸なお母さん、すこしでも幸福を掴まうとして拒まれたお母さん、妾たちを慰めるために、口癖にかう繰返へし仰言るの、おまへたちは御立派なお父さんの子供なんですつて」

「たしかに立派なお父さんだつた。だからこそお母さんは復讐できたんだ」

「復讐ですつて？」

「まつたく」

「復讐ですつて」

「さうなんだ、女らしい復讐だつた。もつとも女らしいやりかたの」

「誰に對してなのか知ら」

「亡くなつた人々、兄、そして僕にさへ、あの人が車から僕に聲をかけたときすべてが了解できたんだ。思ひすがつた、激しいまなざし、それでゐて、あのへりくだつた言葉と云つたら、それを支へた手段が、頸かざり、指輪、お上品な靴シューズ。むかしの素材な粧ひがどこに見られただらうか」

櫻子の眼が坐つた。混亂をまとめるための沈黙がつゞいた。

「それで、どちらが勝つて？」

「かち負けのない、いくささ」

「そんなのあるか知ら」

彼女はだしぬけに笑ひだした。馬が驚いて下り坂を一氣にかけ降りた。

ひと組のざはめきを通りすぎた。曲り角をつたつて賑やかな太鼓がきこえた。町の灯はずつと先きから見えてゐた。

「世のなかつてそんなものなのね」

笑ひのために首すぢまであかくなつたのを押しころしながら彼女は吐息をついた。

「今更ぢやないよ」

さう言つてから餘裕が私を顧みさした。つまりは、理想の高みから奈落の底へ突おとすやうなものではないか。轉落していく血族をみることは愉快なことではない。けれどそれこそは何にも増して確かな事實であり、やがては眞理の光りに向ふ唯ひとつの望みともなるだらう。

行く先々で、酔つたやうに人々は聲をはりあげたり、互に凭れあつたりしてゐた。馬は始終斜めにすゝみ、車はよろめき、その都度百重のからだは傍へなげだされた。

雑沓で道はとぎされた。百重を抱きおろし私は見なれた家のまへで乗物を停めた。ひからびた老人が馬を撫でた。

「お久しぶりで、皆さま御無事ですかい、それはそれは」

太鼓と笛と、何かの囃子に合せてとなへる唄と、それらに耳をまかしながら、兩側から櫻子

と百重とにしがみつかれ人ごみのなかを揺られてゐると、春のほのぼののしさが心いち面に滲んできた。

私は時だま、かうして過去をも大過去をもひとときのうちにすぐすことを娛んだのだ。小さな城下町、赤錆びた傳統、女の兒の長袖姿、胸だかな帯、面ざしうへの白いもの、をとらなびた形をつくるかすかすのものに反いて純粹な、星くづに似た瞳のきらめき、いまだに欲望の虜とはならない初ひ初ひしさ、會ての日、どれほどぎらぎらする眼つきをして私は彼女らの眸のうらを見透す風に、あるきまはつたことか。そして一回として、白々しい泪の嘘が、生き籠つた美しさに打ち克たないことがあつたらうか。

けれど、いま、繪空事のうちにこそまことの相がはびこつてゐるのだ。

「百重のばか、百重のばか。こんなに涙がでる。ほらまた、落つこちた。また、また」

足をふりふり彼女はさげんだ。飴や、鐵砲や、赤い飲みもの、管を賣る屋臺店の幽かな燈をうけ、まぶたのうるほひが七色に輝くのだつた。

「だからいゝかい。兄さんが一人前の小説書くまで、何處へもお嫁にいつちやいけないんだよ」

痛々しさには術もなく、つい慰め顔して唇をひらくと、

「あたしなもの」

「あゝ、櫻子ちゃんも」

百重は暫らくだまつて金魚を覗いてゐたが、

「ふふん、それまで待つたら、あたし達の頭まつしろになるぢやあないの、お兄さんみたい貧乏文士、お小遣ひなんかねだりにきちや嫌ですようだ。ふふん、もう五年もしたら、あたしマダグ・シユナイダアよ」

シユナイダアとは好きな女優の名でもあらう、その刹那私の手は強く握られた。昔はよく鼻血をだしたこの子の氣性ではいよいよ藝術と討死する覺悟なのだ。

言葉なく、ほとほと感じてゐると、

「あゝら、あたしの涙金魚が飲んだわよ」

目をパチクリさせてから花やかに笑つてのける少女のよさだつた。

古い神人の欲情の徴しるしでもありさうに、聖らかにかゞり火がゆらめいてゐた。圓陣をつくつて原始の人類が今尙そこに坐つてゐないと誰が保證でき得ようか。その蒼白い焰ほもとに面おもてをてらしつてゐると、櫻子と百重とは、ことごとと板の段々をあがつて、それぞれちいさなハンド・バツグをさぐつてゐるので、

「いいんだよ、いいんだよ、兄さんは何時か間違へて五十錢銀貨を投げたことがあるんだから、そんなに神様に儲けさせるつて法ないよ」

とひきとどめると、

「思ひ違ひしたんならやつぱり一錢と同じことだわ、神様をだましたみたいもんよ」

「お兄さんに騙されるやうな神さまなら一層有難いぢやないの、さあこれ、お兄さんのぶん」

「あゝ忘れた、これ、お兄さんのあの人のぶん」

うんと背伸びをして、彼女らは銅貨を二つづゝ人のうしろからほうり投げたが、それらしいのが巫女の足元に轉がると、矢庭にまた、どんどんと太鼓がなり互つた。

——「山境」のうち、十一月——

# 純情

小島 正

或る日史郎は母に呼ばれて、姉や弟と一緒に茶の間へ行つて見ますと、何故か母がきちんとそろへた兩膝の上に掌を組み重ね、座ぶとんの上にしゃんと坐つて居ました。

きやうだいは威勢よく敷居をまたいで、入つて行きますと、母は此處へお坐りなさいと云ふ風な目付きをしました。

何やら譯の解らぬながら、たゞならない氣配に壓されて、きやうだいは年の順に肩をそろへ、行儀よく坐ると、母の顔色をぢつとうかがふ風に見上げました。

「お前達もお父さまお亡になつて、随分淋しかつたでせうね、でももう淋しい事ないのよ今度ね、新しいお父さまが家に來て下さるんですよ。然うでないとお前達を幸せにして下さる人がないんですからね」

きやうだいの顔を順々にぐるつと見廻しながら母は何時もきやうだいが聞きなれて居るのは違つた、變に改まつた聲で申しました。

きやうだいは、しばらく合点の行かぬと云ふ目付きをして、お互ひの顔を見合せましたが、やがてこれから自分達が迎へようとして居る出來事の正体を、はつきりを見極める爲めに賢し

げにうつむきました。

親子の間には何やらびーんと張り切つた空氣が流れ初めました。

するとだしぬけに、初めて氣が付いた様に、姉が短かく裾刈りした剃跡青々したお河童頭をがくんとたげ、上づゝた幾分戦へる聲で申しました。

「新しいお父さまが來て下さるんですよ、まあ嬉しい、優しいお父さまなんでせう」

其の言葉はみる／＼うちに母の威嚴ある表情を崩して、にっこりさせました。

「えー、大變優しく立派なお父さまですよ」

幼さい弟は、母と姉の顔を交る／＼きよと／＼した目をして見上げましたが、譯は解らぬながら、誘はれた様に、意味もなくにつと笑ひかけました。

改まつた空氣がそれで一寸うすらぎました。

かう云ふ時、其の場の氣配を人一倍強く感じてぎゅーつと固くなり、自分を忘れて了ふ癖の史郎も恐る／＼顔を上げました。

史郎は何氣なく母の顔を見上げました。

すると、母の心もち上氣した顔から自分が今迄に見た事もない、何やら弾むものを無理に壓し殺した様な、毒々しく、いやな表情を見た様な氣がして、あはて、目を外らしました。

母が自分獨りにだけ、ひたむきな目を向けて居る事を額の先でちく／＼と感じましたが、もう一度顔上げるのは、とてつもなく恐ろしく思はれ、史郎はかたくなにうつむき續けました。

「史郎は嬉しくないの？」

だしぬけに史郎の頭の天つ邊から母の聲が降つて來ました。史郎には變に尖がつた聲に聞えました。

史郎はかつと顔赤らめました、自分にもそれが解る程でした、かすれ聲で途切れ／＼に申しました。

「僕、と、とつても嬉しいんです」

其の夜史郎は何時迄も寝つかれず、幾度も寝返りを打つて居ました。

隣りの部屋で、母が箆筒の引出しを開けたり、閉めたりして居るのでせう。ぎ／＼ときしむ音が襖の細い隙間から聞えました。

球の形をした處に半分程綺麗な透き通つた水が盛られて居て、その表面がしよつちゆうごぼごぼと鳴りながら泡を立て、居るのが、氣味の悪い静寂をつきぬけて、變にするどく聞えました。

水の表面から突き出て居る細長い管には黒いゴム管がはめられて居て、一度曲りくねりながら、阿呆の様に締りのない父の唇に差し込んでありました。

母も叔父も先生も看護婦も其の他部屋中の人が皆物すごい目付きをして、其の硝子びんを見つめて居ました。

硝子びんの水は時々泡を立てる事を止め、又思ひ出した様に／＼と鳴りながらそれをくり返しました。

部屋中に藥くさい嗅ひが流れ渡つて居ました。

幼さい弟は看護婦の額の真中に大きなこぶが突き出てゐるのを見て、とんでもない時にげら笑つては叔父や姉に口を塞がれて居ました。

誰れも彼れも皆硝子びんの方を見つめて居る様子が、史郎には不思議な思ひで眺められましたが、大人達のする通りに自分も硝子びんの水をぢつと見つめました。

すると水の泡立つのが急に威勢を失ひ、ひとしきり／＼と騒ぎましたが、一寸ためらつて居た、大きな透き通つた水たまがばちつと碎けたのが最後でした。

「御臨終です」

冷たくならうとするのに、無理に感動を盛り込まうとする様なわざとらしい聲で先生が申しました。

それと同時に部屋中の人が申し合せた様に、引きゆがんだ顔付きをしてす／＼とうなだれました。

姉は白いハンカチを取り出し、大人くさい様子をして、ぬれた鼻の處をそつと拭いて居ました。

父の枕上に深々と顔を埋めた母の襟足は目に痛い程蒼白く、ほつれ毛がまつはりついて、小ぎさみに戦へて居ました。

弟はきよろ／＼と部屋中を見廻しました。

誰れも彼れも、何かとつもなく大きな悲しみに打ちのめされて居る事が感じて解りました

が、面の様に表情のない父の顔がぞつとする感じで眺められるだけで、不思議に史郎は泣く事が出来ませんでした。

史郎は部屋中をぐるつと見廻はしました。するとふだんの様子をして居る自分が、此の部屋に獨りで浮々した空気を吹き入れて居る様な気がして、かつと顔赤らめました。

「僕は親不孝な、いけない子だから泣けないのだ」と史郎は心配しました。母がしほくと立ち上りました。襟元をきちんと合せ、ほつれ毛をかき上げたりなどして居ましたが、父の面の様な顔をしげくと見つめながら、低いけれども力の籠もつた様な聲で申しました。

「何卒御安心下さいまし、子供は必ずと立派に育て上げますから」

母や叔父に教へられたり、叱られたりなどして、史郎は誰れよりも先きに父のかさくした紫がくつた唇を水でぬらさなければなりませんでした。

史郎のさうする仕科を見て、又母は引きゆがんだ顔付きをして、そつぽを向き直しました。部屋中の人が次々と父の寢床に近く進み出て、史郎のする通りの事をくり返しました。それが終りました。

すると先つき母が「さあー、お父さまにお別れするんですよ」と自分に教へた言葉が史郎は氣になつて拂ひのけられなくなりました。

父が會社の用事が旅に出る時でも、お別のあいさつに唇を水でぬらすなど、云ふ様な變てこ

な事を史郎は今迄に一度もした事がありませんでした。

母が眞つ白い布をそつと父の顔に冠せました。

すると其の時初めて「お父さんはもう歸つて來ないのだ」と史郎は解りましたが、脊筋が冷たくなる思ひがしました。

世の中で自分には一番戀しく、又自分をきやうだいの誰れよりも可愛がつて呉れるのだと幼ない魂は鼻を高くして居たのですのに、一言も自分に口を利かず、此の様にあつさりと、とてつもなく遠い國に立ち去つて了つた父を史郎は憎々しく思ひました。

けれども史郎のさう云ふ憎しみの様なものは、直ぐに史郎の幼さい魂をがくんと小突く様な、例へ様もない悲しみに變つて行きました。自分が父にした様なあいさつを受けた人の行く國は史郎達人間の目には決して見つけられぬ遠い處なのだ、何時か母が史郎に教へた事があつたのです。

とんでもない時になつて、わん／＼としつこく泣き叫ぶ史郎の聲が部屋中に物すごく響き渡りました。

「何卒御安心下さいまし、子供は必ずと立派に育て上げますから」母の云つた言葉は史郎には合点の行かぬ思ひで聞かれましたが、其の時の母の様子は史郎には大變神々しく見えました。

史郎は、はつきりと、それを思ひ出す事が出来ました。「あゝ、僕は耐らない」

夜具の襟をすつぽり頭から史郎は冠つて了ひました。

もう一週間程もすれば、新しい父が来るのでした。

つる／＼はげた茶色つぼい頭の生地に二三本の皺がきざみ込まれ、びんとはね上つた八字ひげは、茶を飲む度に、だらしなく下るので、しよつちゆう氣にして指先でつまみ上げる癖の他處の見知らぬ男が、きゆつ／＼と鳴る、綺麗な底光りのする袴を着けて、此の頃矢鱈に史郎の家にやつて來、母と一緒に客間へかくれて、何かこそ／＼話し合つて居ました。

時々母の明るい笑ひ聲が襖越しに聞えました。

其の聲に引きよせられて、史郎は襖を威勢よく開け、母の傍へ行かうとするのですが、「史郎はいゝ子だから、一寸向ふで大人しく待つて居らつしやいね、母さんは今お客様と大切な話をして居るんですからね」と母に突つ放されました。

史郎は學校からの歸りが遅くなりました。

母は矢鱈に何處かへ出掛けて行く事が多くなり、以前の様に史郎を柔かい、ほの白い手で引いて行つて呉れなくなりました。

箆笥や長持ちを開けたり、閉めたりし、ぺこ／＼としよつちゆう頭を下げる若い男が、づしりとした綺麗な目のさめる様な着物地を持つて來ますと、あちこちいじくり廻はしながら時々陽氣な聲で母は笑ふのでした。

父の居なくなつた淋しさを何時かまぎらして呉れた、母の楽しい美しい寝物語りも聞かれなくなりました。

母のさう云ふそわ／＼した様子を史郎は見て居られぬ様な、しめつけられる様な氣がしまし

た。

ばあやが史郎を探しに學校へ行つてみますと、青々した芝の生えそろつて居る校庭の丘に、しやがんでぼんやりして居ました。

ばあやはしつかりと自分の胸に史郎をだきしめ「坊ちやま、ばあやはよく解りますよ」と云ひました。

「史郎ちゃん、此の頃とつても學校の歸りがおそくなつたのね、お母さま心配して居らつしてよ、新しいお父さまの事でお母さんは忙しいのよ。史郎ちゃんの事を考へて居られないから妾によく聞いて御らんなさいと仰言つて、よ」隣りの寢床から姉がおしやまな聲で言ひました。

するとだしぬけに史郎は姉の方へ首をねぢ向けて怒鳴りました。

「姉さんの馬鹿野郎、僕なんかどうなつたつて構やしないんだ」

史郎の聲で、弟がとぼけた様な顔で起き上り、目をこすつて居ました。

毎朝母が神棚に燈明をつけ、ちつとうなだれて、「子供達が皆いゝ子に育ちます様に」と口の内でもぐ／＼云ひ、ぱち／＼とかしは手を打つ音が自分の幼ない魂をびし／＼と打つ鞭の様に史郎には聞えました。

「お母さん僕はいけない子です。許して下さい」

何か自分を痛めつける様な、むごたらしい言葉を思ひ出す様に史郎は考へてみるのでした。食事の時など、史郎は叱られるぞと思ひながら、母の顔を恐る／＼見ましたが、母は何時も

の表情をして、姉や弟に何か優しく話しかけて居ました。

言葉の無い無視で以つて、自分を母は罰して居る様な気がしました。

後三日もすれば、新しい父の顔を見なければなりませんでしたが、史郎はぢつと落着いて居る事が出来ませんでした。

母が「此の子が史郎と申します」と云つて、自分を何處からか来た見知らぬ人の前に突き出す時、自分は何と云つたらいいのであらう。

それは考へて見るだけでも恐ろしい事でした。

史郎が學校から歸つてみますと家の何處にも母の姿は見當りませんでした。

「新しいお父さまをお迎へに二日ばかり、お祖父さまの處へお泊りに居らつしやいましたのです」とばあやはあはれむ様なしほくした目付きをして史郎を見ながら申しました。

母の目の届かなくなつた家の中で、子供の自由な魂が思ふ存分飛びはねる事が出来ました。

ばあやはおろくししながら、あつちへ行つたり、こつちへ來たりしました。

姉は大つびらに豫習を怠け、寝そべつて、お八つをほくばりながら鼻唄、唄つたりなどしました。弟は土のまみれた足のまゝ亂暴に家の内へ入つて來、雑巾下げたばあやに追つかけられながら樂しげに逃げ廻つて居ました。

史郎は「あゝ僕は耐らない」と思ひながら、きつい目付きをし、服のポケットに両手を突つ込んで家の中を落着きなくうろつき廻はつて居ました。

いよく翌日は新しい父が來る事になりました。

きやうだいは行儀よく玄關に立ち並んで、其の人に、よろこそ居らつしやいましたと叮嚀にお辭儀をしなければならぬのだとばあやが嚴めしい聲で申しました。

史郎は「あゝ僕はどうしよう」と心の内でうなり聲を上げるのでした。

弟は自分だけに特別して見せるばあやの仕度が可笑しいと云つて、赤い顔して笑ひ聲を上げました。

姉は何やら楽しい空想に溺れて居る様なはるかな目付きをし、口元をにやつかせて居ました。翌日は史郎も姉も學校を休む事になつて居ました。

二日の間、思ふ存分自由に振舞つたきやうだいの幼ない魂は、何やら得体の知れぬ興奮の爲めにわくわくして居ました。

「早くお眠みになるんですよ」とばあやに叱られながら、寢床の内で足喧嘩したり、何時迄ももぐもぐして居ました。

するうち、其の様な事にも倦きて、きやうだいは大人つぽく天井を見つめるのでした。

「史郎ちゃんも眠れないのね、私もよ」

しばらくすると燈りを消した、月明りがほのくくと射し込むうす暗がりのなかから、姉が變に浮きくした聲で申しました。

すると、だしぬけに史郎は低いけれども迫る様な聲で申しました。

「他處から來る男の人つて、母さんのお金、皆取つちまふんだよ」

史郎はくすぐられる様なぞくぞくする様なないゝ氣持がしました。



「それからね、姉さん」後に續いて出るものは、もつとくむごたらしい言葉の様な気がし、自分にも恐くなり、史郎はあわて、口の處へ掌を持つて行きました。

其の様な事は知らないけれど、そんな事を幼つぼけな癖に考へる史郎は大變ひねくれた子なのだ、神様にお祈りして、子にして頂くのだと姉が申しました。

弟は未だ眼を開いて居るらしく「姉さん何話してるの」と、とぼけた様な聲で申しました。

何の様な仕事をして居るのか史郎には解りませんが、引つ込んだ目に、眉が迫り、寒げに肩をすぼめ、内ふところに兩腕を突つ込んで居ましたから、兩袖のぶら／＼して居る様子に、何やら下品な調子がつきまつて居る叔父でした。

時々や／＼しながら史郎の家に現れ、父や母から二三枚のお札さをもらふと、又落着かぬげに何處かへ消えて行くのでした。

叔父が来ると、父は何時もいやな顔をし、母と何かこそ／＼低い聲で話し合ふものですから、史郎もきつと悪い人なのだらうと思ひ近づき難かつたのです。

四五日前に其の叔父がやつて來、史郎を掴へて毒々しい目付きをして史郎を見ながら、史郎には譚の解らぬ事を申しました。

「史郎、今度來る新しいお父さんに注意しなくちやいかんぞ、史郎の母さんはとつてもお金持つてるんだからな」

だしぬけに理由もなく史郎は其の言葉を思ひ出したのです。

史郎達きやうだいが玄關に並んで立つて居ますと、向ふの石垣越しにぶぶーとけた／＼と大きく鳴る音が聞えて來ました。

すると突然史郎は恐き物がした様に、はだしのまゝ、まつしぐらに表へ飛び出しました。

「坊ちやま」「史郎ちゃん」ばあやと姉のとききような聲が史郎の後姿に呼びかけましたが、史郎には聞えませんでした。

苔の様な和やかな姿の松が植ゑてある築山が門柱と玄關の間にありました。

母にも新しい父にも史郎は見つけられてはならないのでした。

史郎は築山の蔭に飛び込み、葉の隙間から門柱の方を恐る／＼のぞきました。

ぴか／＼した黒塗りの自動車が其の時、門柱の前に止まりました。

男の人がすつくと降り立ち、續いて母が降りました。男の人は丈が高いらしく、其の肩の邊りに母の大きな髪の毛が並んで居て、何か先の尖がつた長い上着を着た洋服の姿が眞つ直ぐに板を立てた様ないゝ様子をして居ました。

顔かたちは解りませんでした。母と同じ様な白い皮膚をして居ました。

史郎にはそれだけしか見られませんでした。

母が翌日「史郎は居なかつた様ね」と云ひましたが、ばあやは「史郎さま、お加減が悪くておよつて居らつしやいましたのです」史郎の方をちらと見ながら平氣な聲で申しました。

母が「さういけないのね、もう大丈夫なの」と云つて史郎の額に手を當てると「あゝもうすつかり熱が引きましたね」と申しました。

母が向ふへ行つて了ひますと、史郎はばあやの胸に飛び込むと、ぼろ／＼涙のこぼれる顔をこすりつけながら申しました。

「ばあや、僕は何ていけない子なんだらうね」

父が亡くなつてからの久し振りに落ち着いた、何か充ち足りた様な家の空気の中で、皆は食事して居ました。

姉はもうすつかり慣れ／＼しい調子で新しい父に何か話しかけて居ました。

ぴか／＼と金色に輝く指輪をはめた新しい父の柔かさうな大きな白い手で、頭を／＼撫でられて赤い顔しながら弟は、おちよぽ口をして飯を入れて居ました。

史郎は、母の脊を蔭にして時々／＼と新しい父の顔をのぞきながら、音立てぬ様に箸を運ばせて居ました。

「史郎君は大きくなつたら何になるのかね」

新しい父が金縁の眼鏡の奥から優しい目付きをして申しました。

「史郎は軍人になるんでせう。だから、もつと元氣にならなくちや」母が後を振り返つて申しました。

史郎は切なげに、飯かつ込んだ喉をげほん／＼とむせびました。

新しい父を迎へた家族は二三日の豫定で温泉に遊びに行く事になりました。

母がばちつと音をさせて紙入れを閉めると、それを父の手に渡しました。

「妾は荷物が澤山で不用心ですから、一寸預かつて下さい」と母が申しました。

すると突然弟が「お父さんが、母さんのお金持つたよ」とあどけない聲を上げました。

それから思ひ出した様に幾度も史郎の方を振り返りながら、又それをくり返して申しました。皆たまげた目付きをして、ちらと史郎の方を見ましたが、やがて何氣ない様子にかへり、トランクに荷物詰めなどして働き初めました。

だしぬけに史郎は立ち上り、表へ飛び出しました「史郎君、史郎君」と呼ぶ聲を背後に聞きながら「僕は大變悪い子だつたのだ、僕の様な子は此の世の中に居ない方がいゝのだ。死んだお父さんの處へ行かう」と思ひました。父のお墓の立つて居る丘を遠くに見つめながら、史郎は狂つた様にひた走りに走り続けるのでした。

短

歌

## ヘルン 舊居

教授 犬丸 秀 穂

私はこの夏、松江を訪れて或る經濟史資料の探訪に熱中したが、或る雨の降る夕べ私は寸暇を割いてヘルン舊居の人となつたのである。ヘルンの所謂「士の家」であつたこの舊居をヘルンに貸した人の子孫にあたると云ふをとめがしつかにいとやかに案内をして呉れたのであるが、先づ第一に、玄關前に敷きつめられた小石の上に咲きこぼれた紫色の花の美しさは、今尙目の前に見る心地がする。をとめはその花を「るりやなぎの花」と云つた。さういふことを今ここで一々書き記す餘裕も必要も持たないが、ヘルンのありし日のさまをさながらに存してゐるこの舊居は、ここに杖を曳く者をしてヘルンに對する限りなきかたしさを覺えしめる。書齋の前面の庭の蓮池に就いてをとめは

——この池は先生の最も好まれた庭でございます。蓮に雨が降りやがて葉を傾けて池に落ちるさまを殊の他御喜びになりました。

と述べ又

——池には蛙が棲んでゐたので、夫を捕ふと蛇や魴が左側の倉の蔭から出て來るので、そんな時には家内中で、哀れな蛙を庇はれたといふことで御座います。

と語つた。これはヘルンが *Glimpses of Unfamiliar Japan* に於いて「日本の庭」といふ題目の下に此の如く述べてゐる所にあたるのである。

——北側の第二の庭は自分の好きな庭である。大きな草木は何一つ無い。青い小石が敷いてあつて小池が一つの中心を占めてゐる。……この池は蓮池で蓮がその最も大なる妙趣となつてゐるのである。葉が始めて解れる時ほどから最後の花が落ちる時まで、その驚くべき成長の一々の相を見るのは楽しみである。殊に雨降りの日に蓮は觀察に値する。その歪形の大きな葉が、池の上高く揺れつつ雨を受けて暫くの間それを保つが、葉の中の水が或る一定の水平に達すると、屹度莖が曲つてポチャリと高い音をたてて水を零す、そしてまた眞すぐになる。蓮の葉の上の雨水は日本の金屬細工人の得意の題目で、その油氣のある緑の表面に動く水の運動と、色とは正しく水銀のそれであるから金屬細工のみがその感銘を再現し得るのである。

——夏の始には蛙が驚くばかり澤山で、暗くなつてからは言語に絶して騒々しい。が多くの敵の攻撃を受けてその敵が減るに連れて、週一週その夜の喧嘩が弱くなる。蛇の、中には長さたつぷり三尺はある蛇の、大家族がその群落へ時折侵入する。被害者は屢々憫れな叫び聲を發する。

(譯文 大谷正信氏)

蓮葉に雨の降りつつこぼるるを愛でしといふは心にぞしむ

くちなはに肉を與へて庭池の蛙の命惜しみ

たまひき

習作

佐口透

高山市城山公園に登りて

白まゆみ 飛驒の都の 城山ゆ 振放おとけ見れば 何處いづ方も 山又山と 疊かさねまりて 緑の森  
に 蒔まさす 夏日照り來て 陽の光は 嶺かにたふふ しかすがに 山深みかも 向むかつ峯  
ゆ 吹き寄す風は 肌にしみ 蒸被むしぎぬち 戀こほしめば はつきなれども 飛驒國は 秋と  
し思ほゆ 居れど飽かぬかも

反歌

はつきなる高み國原行き 回ためば 凜寒れんごんむ寒む  
と髪を亂しぬ

山峡

山峡の奥處おくがの御寺みやうに坐り居て 川瀬のとよめ  
き聞きつつ暮れぬ

峡深き御寺のゆふべに讀む經は 川瀬の音に  
まどりて聞ゆ

時ときづくにとよもす 峡の瀬の音に味寝あじないしなき  
亦また都會まち入我は

霧立きりたてるはつきつきの深山の旦あしたには圍爐裏いろりのふ  
ちに寄るべかりける

山峡の静寂しじまの中に戀こひ來て 湯槽ゆがねに聞き居り  
ひぐらしの聲

夏の日なつひに蒸もされて 香かに立つ 黒土くろつちの茄子なすの畑  
に舞まへる 蚊白蝶もんじろ

夕ゆふづく日ひさすと取寄とる 群山ぐんざんは朱あかむらさきに  
雲照うりわたる

山峽の見わたす限り緑なるなかに真白くう  
ねる村道

ぬば玉の夜の真中の飛驒の天天の廣らにか  
かる星かも

日本の屋根とふ高原に立ちて見れば四方の  
果皆山し廻れる

はえ魚は脂肪乏しかりしかすがに飽かず食  
うべき都會人われは

都會人の得がてにすとふはえ魚をここだ食  
うべて心足らへり

あかときの高み國町に鳴る鐘は山に反響し  
ひろがり渡る

折にふれて

夜をくだち相聞の歌讀むときは萬葉人の情  
熱し偲ばゆ

無心されやがてうけひくわが性をお人好し  
と皆思ひ居るらし

日頃見るをみなと語りし夢見しがわが下心  
はすべなきものか

度ましきをみなも小暗きたとがれの街にし  
遇へば笑みにけるかも

濃き紺の袴をつけしをみな子の容美ければ  
貴に思ほゆ

ひたぶるな若さの心も秋開けて來ん春戀ひ  
つつ衰へにけり

狭庭邊は秋たけるまゝま轉まろび合ふ落葉の音  
すあらし吹くとき

詩

私は煙草を口にくはへて町を歩いてゐた。六月の太陽は嫩葉に映えて微風に揺れてゐた。神経は平衡を失つて意欲は轉倒し始めた。私は赤いポストの横を抜けて芝生に寢轉んだ。混沌と錯覚は美事なる倒影を描いて踊り始めた。私の神経はふくれあがつて飛躍した。濃藍の天空が律動せる斑点を作して私を抑へ付けた。

間もなく私の神経は激しい焦躁にやかれ始めた。狂想曲の交錯が漸て感性の世界から意志の領域に浸沈し現實の苦惱を拵へた。

烈しい魂の慄へは斷崖の一線に立つて溪谷を見る勇氣をもたなかつた。

一瞬！

生死を超越した無形の反撥が怒濤の神経を靜寂の沼に陥れた。

意欲が生れた時に私の肉体は無意識に突撃した。

虚空の彗星めがけて跳躍の一動、

旋轉！

疾走！

把握せんとした彗星は美事醜怪の現實を暴露して地上めがけて墜落した。私は同一律の桎梏に捕へられ、哀れ一個の肉塊となつて再現した。



雜詠

仲秋明月

月の瀬に洗濯をする女かな

影法師を踏み合ふ街の子供かな

明月や半鐘の台の遠く見ゆ

野外教練

秋山の落葉の上の晝餉かな

秋山の松影の濃き路を行く

森本壽大郎

## 謡曲雜考

—源氏物語との關係について

佐 口 透

能樂即ち謡曲の作者が謡曲を創作する際に於てその出典たる諸文學作品或は歴史的事實、傳説話、故事等を如何なる態度で考察理解したか、或は如何なる手法即ち脚色法によつて劇型式に再現したかについては何等かの概念を得る事が出来るかも知れないと私は大いなる期待を以て考へて見た事がある。普通能樂なるものは元曲の模倣によるものと云はれてゐるが、諸外國の古代の大衆的劇文學に劇型式としての我が謡曲に類似せるものが無いだらうか、その構成に共通した点が無いであらうかと考へる事も興味ある事である。併し此の隨筆に於て私は如上の事を考察せんとするものでもなく又文學としての謡曲を知るに未だ日淺き私の如きものに取つてかやうな事は爲し得ざる所であり、又それは單なる漫然たる考へに過ぎないのであるから、私は只試みに初頭に述べた点について一例として謡曲玉葛と源氏物語中の玉鬘についてその連絡關係を考察するに過ぎない。源氏物語より取材した其他の謡曲を調べる事により始めて謡曲作者の態度や手法が完全に分る事になるだらう。

I

玉鬘は源氏物語の第二十四卷玉鬘の卷より先づ現はれ以下數卷にわたつて第三十卷あたりで大体終つてゐる此の物語中の一女性であり謡曲玉葛の中心人物でもある。

扱て、此の源氏物語中の一女性玉鬘は如何にして生れ、如何なる生活を送つたか、即ち光源氏を中心としてその他の貴族と如何なる交渉を有してゐたか、そして謡曲作者がそれを如何に觀察して謡曲文學に再現したかを見る爲にその梗概を簡単に述べなければならぬ。

玉鬘は光源氏の正妻葵の上の兄頭中將と三位中將の娘にして薄幸なる生活を送つた夕顔との間に出來た女である。光源氏は偶然なる機會よりその素性も知らず頭中將に棄てられた夕顔と關係し、やがて夕顔の急死と共に彼女の素性を知るに至つた。即ち夕顔の召使右近の語る所によれば、夕顔は三位中將の娘で、親の歿後寂寞として暮してゐたが、偶々頭中將に一時愛されるや、頭中將の妻は夕顔を憎み恐喝したので夕顔は之を怖れ轉々として五條の住家へ移つて來たものであつた。此處に初めて夕顔なる女性が源氏に明かとなりそして又あの夏の雨夜品定物語の時頭の中將が語つた女である事を知り、不憫に思ひ更に三つになる娘、即ち玉鬘の居る事を聞き夕顔に對する愛着の念は玉鬘にうつり引き取つて自分の娘として養育せんと玉鬘を探し求めようとする。玉鬘は四歳の時夕顔の乳母の夫が太宰少貳に任せられ筑紫へ下向する際に連れられて西下したのであつた。

此の後玉鬘が現はれるのは、源氏物語の夕顔の卷より二十數卷後、玉鬘の卷に於て彼女が二十歳に成人し（此の時源氏三十五歳）上京して來る所迄月日は流れるのである。即ち今迄は玉鬘が此の世に生を享け、源氏が奇しき縁を感じるのであつて、成熟せる女性として、人間とし

ての玉鬘は玉鬘の巻より以降數卷に於て現はれ、謡曲も亦、幼時玉鬘が筑紫へ下る時とこれ等の時代の生活より取材したものである。今その時代の玉鬘の生活を見るに先立ち、源氏物語の開卷、二・三巻を讀んでその感想の一端を論じて見る事にする。

源氏物語の主人公は周知の如く光源氏であるが終りの方で非常に影が薄くなつてゐるし數多の人物を配して構成した長篇小説としての偉大さの爲に時としては、源氏以外の數多くの他の人物に更に興味を奪はれる。要するに作者は數多の平安朝文化の最尖端を行く洗練された各種のダンディな紳士淑女を一面に配列し或る獨特の観点からこれ等の數十百人の人物の關聯をリアステイツクな筆致で克明に描寫しただけなのである。或る観点とは後に述べるであらうが、式部がこの小説を書くべき意圖は想像するに只これだけに過ぎないと考へる。紫式部は文藝作品として小説を書いたと考へるよりも、むしろ一つの記録として書いたのだと見るのが至當である。此の事も紫式部自身も云つてゐる。

今日の小説の本道はリアリズムであると云ふ事は定説のやうになつてゐるのであるが、今日の我が國の作家の多くが創作上にそれを完全に現はし得て居ないのは事實である。紫式部のリアリズムは所謂素朴なリアリズムではあるが時としては一歩進んだリアリズムの段階にもある。とは云へ紫式部は作中の人物に對しては單に正面からぶつかつて描寫してゐる所が多い。此の点ドストエフスキーや更に進んだ段階にあるデイドの使ふリアリズムには及ばない。ドストエフスキーやデイドは自分の描かんとする人物を眞正面からぶつかつて描かうとはして居ない。單に人物と人物との關聯、相互關係を冷靜に觀察し描かうとする材料に特に加工を加へな

いでそのまゝ、今云つたやうな態度で書いてゐるだけだ。此のやうな態度でドストエフスキーは「惡靈」を書いたし、デイドは自分の最初の小説と稱した「贖金作り」を書いた。實際「贖金作り」を讀んだ人はその手法の今迄のくどくどした小説と異つて簡潔な鮮かさを有してゐる事に氣づくであらう。「贖金作り」は何人かの可成り多くの人物が描かれてゐるが、デイドは一度もその人物と眞正面から取組んで描かうとはしてゐない。二人なら二人の間を、その關係を描く、これが次第に多くの人物に及ぼされ、それ等のあらゆる關聯が完全に一つの塊りとなつて小説に完成される。此のやうな手法のリアリズムをモニターデュ・リアズムと現代の批評家は云ふ。その定義はどうでもよいとして、これが最も進歩した技法である事は間違ひない。さて源氏物語はどうかと云ふに、確かに作者は各々の人物と正面から取組んで個々に忙がしげに描寫してゐる所が多いが、一方人物と人物との關聯を無意識的ではあらうが、巧みに狙つて描寫してゐる所が少くない。それがなくてはあの大部なくどくしい情事小説は讀み始めに先づ飽かれてしまふだらう。それに源氏物語は數多くの人物が可成り長い月日にわたつて親から子へと時間的にも、又空間的にも廣い範圍にわたつてゐるのであるから、どうしても今云つたやうな技法は必然的であり、又今云つた性質のものであり乍ら此の物語が効果を失してゐないのは此の新リアリズムが或る程度迄存在してゐるのに違ひなからうと想像される。かく考へれば紫式部の技法は無意識的乍ら偉大なるものがあると云ふ事が出來よう。

先に私は或る獨特の観点から作者は數多の人物を克明に描寫してゐるのに過ぎないのだと云

ひ、その説明を保留して置いたが、此處にそれを述べて見よう。これは絶対的なものであると私は信ずるのである。即ち紫式部は「世の中」と云ふ一つの觀念を「男女の仲」と本能的に直観してこれを源氏物語五十四卷の大小小説に流れる根本精神として、小説の基礎としてゐるのである。例へば空蟬の卷に「世の中をまだ思ひしらぬ程よりは……」とあるが、此の「世の中」なる語は明かに男女の仲と解釋されるものであつて、源氏物語は畢竟する所此の「世の中」のあらゆる千變萬化をリアリスティックに精寫したのに過ぎない。「世の中」を「男女の仲」と解釋して憚らなかつた平安朝時代の貴族の時代精神フレイグメントは奈良飛鳥時代の後を享けての當然の事であり、紫式部も亦時代のインテリとしての社會觀を誤まらず抱容してゐたのである。「世の中」てふ觀念は具体的に云つて人間の共同体そのものであるから、式部が「世の中」を「男女の仲」と解釋規定せざるを得なかつたのは餘りにも當然の事なのである。併し私は「世の中」について社會學的に更に具体的に説明し得る爲に、和辻氏の「人間の學としての倫理學」を参照し和辻氏の「世の中の意義」を紹介して見よう。即ち倫理學的に或は社會學的に「世の中の意義」を和辻氏が如何に考察されてゐるかを知り、源氏物語の「世の中」なる語の説明の補ひにしたいと思ふ。

先づ支那の佛教學者の云ふ所によれば「世間」の觀念を説くに、世は遷流であつて刻々として他のものに轉化する故に不斷の自己否定である。併し我々はそれを對治し得る、即ち自己否定を否定し得るが故我々は又遷流の中にあると。かくして世の意義は破壊性、對治性、覆眞性の三つの契機に於て規定されるのであると。世間とは、かくの如き世の中に墮してゐる事であ

る。併しこれは人の社會の意味に觸れてゐない。世間は時間的なものよりもむしろ空間的の意味が勝つてゐるのであるとされる。氏は更にこれを日本的に解釋し、日本では「世」は場所的な意味を含み、世は明かに生の場面としての社會と意味されてゐる。更に「世」と云ふ語は生の場面としての社會を意味するのみならず「間」及び「中」と云ふ言葉も亦人間關係を表はすとされる。「間」、「中」は空間的な意味を持つと同時に人と人との間である。親子の間、夫婦の間等に於ては空間ではなくして「交り」、「生の關係」を意味すると説かれ、そこには物理學的に不可能な「遠くて近い」、「圓くて角張る」と云ふ如き辨證法的な關係があると論ぜられてゐる。かうして我々は「中」によつて人間の共同態が成立してゐる事を承認し、「間」と獨立に先づ人々が存在するので、何らかの「間」、「中」に存在しないやうな人は絶対にあり得ない、男女のなかに於ては男或は女であり、なかが存在の地盤であつて、我々は人間の考察に決して「間」を離れてはならぬと氏は説かれる。以上の如く「間」、「中」の語は空間を意味すると共に人の間柄を意味する。確かに我々は人の社會が空間的にも把握されてゐる事を認めざるを得ない。廣い世の中、狭い世間と云ふやうな云ひ現はしがそれを示唆してゐる。しかし社會のなかと本來人間關係のなかである。さうして人間關係は空間と異つて辨證法的な間柄である。然らば社會を生の場所と見、その場所の中を意味する場合にも、その場所自身が空間的ではないと云はねばならない。従つて世の中と云ふ場合の「中」は單に空間的意味のみである事は出來ない。男女の仲、親子のなか、と云ふが如きなか、その最大の規模に於て世のなかととなるのである。と以上のやうに説かれてゐる。

大体の意味を拔萃して述べたので簡單すぎて不徹底な所が多からうと思ふが、大体の概念は掴み得ただらうと思ふから、詳しくは同書を参照して頂きたい。さて本論へ戻つて、源氏物語の「世の中」は直ちに男女の仲である事は明白であるが、特に戀愛と云ふ観点より人の共同体たる社會を見ると云ふ特殊の社會観、人生観が五十四巻を通じて徹底的にみち溢れてゐるのであつて、これこそ源氏物語の比無き特色で、此の視点あつてこそ、あの大部が文學作品として、長篇小説として價値を有するものであると思ふ。

更に具体的な点に入つて論じよう。最初の桐壺の巻より光源氏を描寫し始め全篇の端緒としてゐる点も確實で、帚木卷は一見此の小説の進行上大して重要な役目をなして居ないやうに見えるが、その女性論の蔭に後に出現すべき人物を暗示し以下の卷々の鍵としてゐるが如きはドストエフスキー等によく見られる手法で誠に巧みと云ふべきである。紫式部は帚木の巻に於て一時停止し數々の伏線を殘して以下次第に綱を繰り出す如く我々の前に人物と人物のあらゆる關聯を描寫して示して行くのである。人々は帚木の巻の品定物語を紫式部の女性観であると、その精緻さに驚く。帚木の内容は確かに女性観には違ひない。併し注目すべきは紫式部は恰かも自身も女性である事を忘れたかの如く客觀的に實に冷靜に描寫して居る事である。女性に特有なヒステリックな弱者道徳を振廻す事なく、否屈從的でさへあり、何も云はうとせず男の立場の勝手な女性観を三人の貴族によつて示し、我々の眼前に置き同時に以下の物語の進行への鍵としてゐるのである。平安朝時代に於ては男性は概して女性に對して本能主義的な感情を抱いたと同時に、女性は男性に對して何等の對抗を試みず只管受動的で、男性を満足させる

一つの機械の如き形であつた。尤も未婚の美女は少くとも男性の崇拜的であつただらうが、結婚すれば一轉して男性の奴隸の如き地位に下るを普通とする運命にあつた。これは貴族社會に於て著しかつたから下層階級にも當然の事だらう。併し一部の理智的な知識階級の女性即ち主として女流文學者の連中は決してさうではなかつた。常に軽い反抗とアイロニーが男性に對して用意されてあつただらう。これによつて雨夜品定物語を見れば紫式部が這般の事情を知悉して居て一種の諷刺の如き意味で書いたものとも見られよう。それを只表面的に急いで表現しなかつた所に好さがあり又「男女の仲」としての「世の中」の女性に對する必然的な薄幸を忍んで傍觀するやうな態度を取つたのであらう。

次に平安朝時代の先驅をする飛鳥奈良朝時代の人々の戀愛は此の時代のそれとは如何なる差異があつたであらうか。飛鳥奈良朝時代は建國守成の業と共に輸入文物による新文化の慈光の注ぎ初めた時で、素朴な時代精神を有する人々の健康なロマンチズムがその當初に存在してゐた如くに思はれる。併し彼等には只大陸より輸入したばかりの生な新文化あるのみで一般に洗練された文化生活、市民生活は缺如し次第に安易的になつた人々は擧つて官能的な戀愛に陥らねばならなかつた。その多くは全く利他的な享樂的なものでプラトニックな戀愛は一瞬間姿を現はす事で後に殘るものは雷たゞれた肉慾的な享樂生活に過ぎなかつた。そこには抒情的な靜かに戀愛を楽しむ風がなかつた。これは萬葉集の相聞歌を見れば容易に理解出來よう。相聞歌は何と非論理的な激流の岩にほとばしるやうな瞬間的な、熔岩のやうな強熱された言葉の羅列だらう！ 飛鳥奈良朝時代のあらゆる人の思想を網羅する萬葉の相聞歌の多くは皆官能的な

臭ひが強烈に漂うてゐるのである。短歌としての萬葉の相聞歌のある幾分かの歌の價値を認めてはゐるが、島木赤彦も官能的な点は認めて居るのである。併し乍ら一方には健康なロマンスイズム、自然に透徹し人生の深奥所にも到達した一部の人々の崇高な精神生活もあつた。飛鳥奈良朝時代はこれ等二つの對立してゐたやうな時代である。此の對立、矛盾を次の段階としての平安朝時代は如何に解決したか。それは止揚された如くでもあり、止揚されざるが如くでもある。平安朝時代の人々の戀愛は飛鳥奈良朝時代と同じく官能的であつたが、人々の生活意欲、民族意識は弱まつた。頼母しき力強さと雄々しさが失はれて抒情的な戀愛、それには常にパソスが伴ふものが主流をなしてゐた。以前よりも社會的生活が發展し、狭い乍らも山紫水明の平安京に住んで居たので洗練された情趣を解する人々の戀愛三昧の生活が平安朝時代のすべてであつた。即ち建國後の國內、國外に於ける諸種の戰爭、戰亂の血の匂ひの生々しい野人的生活があつた。去勢化されて來ると、そこに必然的に現はれるものは洗練された社交的、宮廷的、戀愛的生活様式である。これは生活理想の型を生み出し、みやびやかなるものへの趣味、女性崇拜、戀愛尊重等からなつてゐるものである。美しき女性は美男を、美男は美しき女性を求め、同時代人の情熱は美人が醜夫の妻問ふを許したのを見て嗤つた萬葉集卷十六の「美麗物何所飽かじを尺等さかた等らし角かどのふくれに婚娶しよんぐひにけむ」の歌によつても想像出来るが如く前代と同じであつた。只前代と異なつてゐるのは官能的な情熱の發現の際にもどことなくリリックな情趣とパソスが伴うて居たのであつた。

道徳的に考へて本論の主題たるべき玉鬘の事件、藤壺の事件は驚くべき奇怪事であり人間のテイツクな情趣とパソスが伴うて居たのであつた。

欲望の動物的の現はれの如くに見える。玉鬘と源氏間の戀愛、その他空蟬、夕顔の事件にしてまさうであらうが、「世の中」を「男女の仲」と必然的宿命的に見ねばならない運命を前代から與へられてしまつた彼等平安朝時代の人々は此の種の戀情は抑へる事も出來ず、又抑へようともしなかつたのだらうが、しかし常に人間的にリリズムとパソスの發現が伴うて居たのであつた。

光源氏の藤壺、玉鬘等に對する戀愛は併しながら、シェークスピアのペリクレーズに於けるアンタイオカス王がその實子の王女に破倫的な關係を結ぶやうなものとは本質的に異つてゐる。彼の場合は恐ろしき人間の滅亡を示すやうな邪道でしかない。併し光源氏の場合は藤壺が實母桐壺に容貌の似て居た点に於て、玉鬘が夕顔と似てゐた点に於て、源氏の戀愛はデカダンス的ではあるが、リリックな正常な戀愛が發現して居たと見るべきで、遙かに人間的であり、心理學上、精神分析學上、動物的本能的な情慾の發現ではなくして、少くとも初めに於てはノーマルな状態であつたと解すべきであつて、かくして源氏の行爲も「世の中」を「男女の仲」と規定する時代精神の中にあつては、必ずしも怪しむに足らないものであり得ようと思ふ。併し乍ら彼等が前時代の所産を解決出來ず、そのまゝ受繼いでむしろ慘とも思はれるやうなデカダンスの中にひたつてゐたのは我等の同情に値する所であらう。そして今主問題たるべき玉鬘も同様な運命と生活を與へられるのである。謡曲作者も常にかくの如き点を觀察してゐた事と思はれる。

玉鬘が成人して現はれて來るのは玉鬘の巻を第一歩として「胡蝶」、「螢」、「常夏」、「篝火」、

「野分」、「御幸」、「藤袴」、「眞木柱」の數卷を主とし紫式部は此の數卷を精細に巧緻に描寫し以後は全く姿を消してしまつてゐる。源氏物語の此のやうな人物の新陳代謝は仲々すぐれたものと思はれ、堂々たる長篇の名に背かない。

さて玉鬘は先に一寸述べたが如く、乳母の夫少貳と舟運にて四歳の時筑紫へ西下する。それから十數年玉鬘は田舎にて生活を送り、その間の消息は皆無である。二十歳に成人した頃九州の豪族大夫監に先づ言ひ寄られるが、それを拒んで愈々上京し本舞台へ上るやうになる。玉鬘は人生二十年にして初めて「世の中」へ送り出されるのである。平安朝時代の人間は已に十三、四歳にして成熟し戀愛生活にも入る者が男女とも多かつたのであるから、二十歳にして玉鬘が「世の中」へ踏み込んだのは遅い方で、それだけ玉鬘は肉体のみならず精神的にも十分成熟し、物語中の多くの女性程淫蕩的でなく理智が十分發達してゐたやうにも思はれる。玉鬘は平安京に上り初瀬詣をした時夕顔の侍女右近に會ひ、次で源氏の養女となり花散里に後見せられた。長い間待ちあぐんだ源氏は玉鬘を得る事が出来、更にその美はしさに打たれ、そして夕顔に似てゐるのを見てどんなに悦んだ事であらう。次で紫上に對面し三月二十餘日源氏は宴を開いたが、その時玉鬘を懸想する人多く、源氏の弟兵部郷宮(螢)、髻黒の大將、柏木中將等玉鬘に戀情をよせ、源氏自身も玉鬘に心を奪はれてゐる。初めて貴族社會の生活に入つた玉鬘にこれ等の慕ひ寄つて來る男性は如何に心に衝動を與へたであらうか。特に源氏の玉鬘に對する態度は人の不審を惹いた。紫式部は玉鬘を八重山吹の露のかゝつた夕ばえのやうだとその美を描寫してゐる。十二月大原の行幸みゆきの際、玉鬘は父頭中將を見るが、又源氏の美しいのに及ばないと感

ずる。髻黒は色黒く髻もぢやなので嫌惡の念を抱く。かくして源氏三十七歳の時玉鬘は尙侍となるが、此の頃より玉鬘を戀ふ人々、夕霧、柏木、髻黒、螢等數人、玉鬘に歌など贈り熱烈な愛を打開けるに至つて玉鬘の心はいや増して亂れて來る。その上宮中に尙侍となり中宮や弘徽殿女御に對し氣兼をせねばならなかつた。此の程は玉鬘の思ひ最も亂れ、集ひ寄る男の葛藤に悩み苦しんだ時であらう。併し終に他に比して優れて居たとも考へられない髻黒の妻となるのであるが、この經緯は玉鬘の理性の可成りしつかりした女性である事を思はしめる。かねて玉鬘に戀慕を感じて居た源氏はこれを知つて大變殘念がつたがどうにもならなかつた。特に紫式部の源氏が玉鬘に對する感情の描寫はうまく數々の歌と共に玉鬘をはつきり浮び上らしめてゐる。

以上は大體謡曲と關係を有する玉鬘を略述したのであるが、これが如何にして謡曲に再現されたか次章より始めよう。

## II

謡曲には源氏物語より取材、脚色したものに玉葛(謡曲では鬘は葛と直されてゐる)の外、「葵の上」、「源氏供養」、「野宮」、「半部」等があるが、「葵の上」よりも優れては居ると思へないが、構成の簡潔、用語の優美、幽玄なる点に於て文學作品として見れば玉葛も可成り優れたものと思はれる。凡そ謡曲の多くは一種の佛教思想のプロバガンダであるので即ち佛の加護の厚さによつて前世の罪惡が救はれると云ふ思想を擴める道具ともなつてゐたのである、と云ふよりは寧ろ當時は戰亂後で、はかない現世に對する無常觀の風靡した時代であつたのだから、

それに對する新興佛教の強勢は必然的に謡曲作者に影響を及ぼさざるを得なかつたのであらう。實際當時の新佛教の力は偉大であつた。そして又如何なる武將、英雄豪傑と雖も經典によらねば來世に成佛出來ないであらうと云ふ思想が強く、此の間の事情を逸早く觀取した謡曲作者はやがて複式能の形式により佛徳の偉大さを高揚した。謡曲は佛教の宣傳具になつたと同時にそれによつて初めて能樂は隆盛になり能樂師はパンを食ふ事が出來たのである。かく考へれば能樂乃至謡曲作者は當時のコマーンシャリストであつたとも云へよう。特に源氏物語は「男女の仲」を書いて居るものであるから、ピュアリタンの傾向の強かつた室町時代の知識階級に對して源氏物語中の人物の妄執、苦惱、非倫理的事實を批判し佛徳を宣揚すると云ふ事は彼等の精神的傾向に迎合し容易に成功を收め得たのであらうと思ふ。

謡曲玉葛の作者は原作源氏物語をよく理解してゐると思ふ。數卷の大部冊の中から玉鬘の半生を把握し、その意味をよく考察理解し又能樂としての構成上も亦要領よく換骨奪胎して表現してゐる。源氏物語中に於て紫式部は玉鬘を只客觀的に描き批判を下してゐないが、謡曲に於てはその作者は玉鬘を全く主觀的に批判し描いてゐる。この点に玉葛の謡曲としての存在價值があるのである。

さて具体的に謡曲玉葛そのものに入つて原作源氏物語と比較對照しつゝ、分析解剖して行かう。他の多くの複式能(精靈能)の形式と同じく玉葛も前シテ、後シテに分たれる、謂はば第一場と第二場なのであるが。出場人物も亦型通りに謡曲作者の主題としてゐる中心人物(シテ)とそれに應ずる旅僧(ワキ)に分れる。諸國一見の旅僧、初瀬川のほとりに歩んで來ると、女舟人

が現はれる。これは源氏物語、玉鬘の卷に玉鬘が四歳の時少貳と共に筑紫に渡る時の舟の中を再現してゐるので同時に又玉鬘の過去を現在化したものである。

シテ「程もなき、舟の泊りや初瀬川、のぼりかねたる氣色かな「舟人も誰を戀ふとか大島の、うらかなしげに聲立てて、果てしもいさや白波の、よるべいづくぞ心の月の、御舟はそこ果てしもなし。

とあるのはその時少貳の娘が、面白い浦々の景色を見て玉鬘が母夕顔を戀ひ慕ふた時、同時に又舟人が故國と別れるのを悲しんで歌つて居た時、詠んだ歌で即ち「舟人も誰を戀ふとか大島のうら悲しげに聲の聞ゆる」「こしかたも行くへもしらぬ沖に出でてあはれいづくに君を戀ふらむ」で謡曲作者は此處に玉鬘の數奇な運命の第一歩を我々の眼前に展開せしめる。そして女舟人はその時の悲しき思ひ出を謡ふのである。女舟人はかうして次第に旅僧を導き物語を展開する。

シテ「これこそ二本の杉にて候へ能く能く御らん候へ。ワキ「さては二本の杉にて候ひけるぞや「二本の杉の立所を尋ねずば、「古河野邊に君を görmしやとはなにとよまれたる古歌にて候ぞ。シテ「これは光源氏の古へ、玉葛の内侍この初瀬に詣で給ひしを右近とかや見奉りて詠みし歌なり。「共にあはれと思召して御跡をよく弔ひ給ひ候へ。

と展開して行くのは玉鬘が二十に成人し上京して初瀬に詣でて夕顔の侍女右近と劇的再遇をした時右近が「二もとの杉の立ちどを尋ねずば古川のべに君を görmしや」と詠むと返歌に玉鬘「はつ瀬川はやくの事はしらねどもけふの逢瀬に身さへながされぬ」と詠んだ箇所を謡曲作者



は困難な時間的なへだたりを克服して巧みに筋を運ばせてゐるのである。そして夕顔が頭中將に送つた歌「山賤の垣ほ荒るとも折々は哀れをかけよ撫子の露」の歌を謡曲の中に折り込んで女舟人は玉鬘の苦しかりし古へを謡ひ、

地「たゞ頼むぞよ法の人、引ひ給へ、我こそは涙の露の玉の名と、名のりもやらすなりにけり（中入）。

となつて第一場は終る。即ち第一場では女舟人が玉鬘の靈である事を告げしめ、謡曲作者は愈々次の場に於て玉鬘に前世の苦惱、妄執を語らしめ批判的態度を取る。

後シテ「戀ひわたる、身はそれならで玉葛、いかなるすぢを尋ね來ぬらん、尋ねても、法の教へに逢はんと、心ひかるる一筋に、その儘ならで玉葛の、亂るる色は恥かしや。つくも髪、つくも髪我や戀ふらし面影に、「立つやあだなる塵の身は、「拂へどく執心の、「ながき闇路や、「黒髪、「飽かぬやいつの寝亂髪、「むすぼほれゆく思ひかな。

に於て玉葛を廻る男性の愛慾の葛藤、玉葛の妄執を再現した。玉鬘は理性の勝つた女性であつたらしいが、それでも人間としての女性である、抑へ切れぬ二十台女の愛慾、又義理、養父源氏の戀情、種々様々なる「世の中」の諸相が玉鬘に振りかゝつて引きずつて行く。源氏の玉鬘に對する熱烈な戀愛、源氏の美貌に惹かれて煩悶する玉鬘の心理描寫は、源氏物語「胡蝶」に極めて艶麗に書きつくされてゐる。それに比して此の謡曲の詞句は抽象的ではあるが簡潔に巧みに再現されてゐるのである。胡蝶の巻に於て源氏の玉鬘に對する戀、それに對する玉鬘の態度は紫式部によつて決して批判的に書かれてゐない。單に事實の客觀的描寫のみであり、それ

で好意的にさへ書かれてある。そして實は當然な事なのであるが玉鬘を責めない。「世の中」は「男女の仲」であると見た作者に取つては客觀的描寫だけで十分であり特に意志を表はす事はいらぬしあり得ないのである。假にも玉鬘を戀したのは養父となつた源氏であるが「男女の仲」を必然的に見た紫式部の思想即ち平安朝時代の倫理は敢へて此の場合のみならず物語中の他の我々に取つて非倫理的でさへあると思はれる事實をも否認しようとしなかつた紫式部の態度は或は當然であつたかも知れない。

然し此の謡曲作者にあつてはさうでない。かくの如き事はピュアリタンの社會狀勢が認めない。即ち室町時代にあつては男女の戀愛を罪惡と見、平安朝時代の戀愛至上主義に反抗してゐたのである。これは武士道文化の平安時代文化の克服であつた。此のピュアリタンの精神を謡曲作者が巧みに捉へ來て利用したのである。謡曲作者は玉鬘の生活を否認してゐるのである。玉鬘の戀愛生活は罪業重きものと觀する、何となれば武士道精神は男の心を亂し惱ます女的美貌こそ時代精神に反する罪業深き毒物と見てゐるからである。玉鬘の現世に於ける行爲も正にかくの如きものであつて特に源氏のとこの戀愛は謡曲作者の批判的となつてゐて幾多の罪業を残したとするが、それでも佛の功德の有難さに玉鬘も亦救はれ得るであらう事を示すのである。謡曲に於ても玉鬘は如何にも戀愛生活の妄執が深さうに描かれてゐる（前述の謡曲詞章）。それが直ちに次のやうな祈禱によつて容易く妄執が晴れるとは如何にも女性を見縊つた見方で、室町時代の時代精神が窺はれる。

ワキ「たとひ業因重くとも照らさざらめや日の光、照らさざらめや日の光。大慈大悲の誓ひ

ある法の燈の明らかに、亡き影いざや弔らはん、く。

謡曲玉葛は出典源氏物語より大体かくの如く變化再現されてゐるのであるが、原作と常に密接な連絡を有してゐるので、源氏物語を理解し又謡曲の成立當時の事情、社會狀勢を理解してこそ我々は謡曲玉葛の眞の意味を知る事が出来ようと思ふ。

謡曲玉葛は室町時代の時代精神、道徳によつて解剖され批評された源氏物語の玉鬘の變形である。そして以前に記した此の外の多くの源氏物語より取材せる謡曲にあつても、否その他の出典に於ても悉く室町時代精神と云ふいぶきにかけられた再現作品である。であるからその取材法は特殊なものを除いて多くが共通であると考へられ、その出典の多種多様なるに比し謡曲としての表現は單調である。只我々はその寓意の成功してゐるのを認めねばならない。

然し乍ら謡曲作者がその出典を研究し、繁をすてて、冗を省き美麗幽玄なる辭句を綴合はせ劇型式の表現に成功した点は各曲毎に種々の變化を有してゐて文學としての謡曲の偉大なる價值であらう。

此の事は「玉葛」と源氏物語の玉鬘を比較して考へ得られる事で、その他の取材法についても大體類似した点があるに違ひない。尤も各々には異つた観点を持つてゐるだらうが、少くとも源氏物語より取材したのものについては共通してゐるだらう。

それはとも角として平安朝時代精神と室町時代精神と比較考察し謡曲玉葛と源氏物語中女性玉鬘を觀察すると我々が如何に時代精神なるものがその時代の文學に偉大なる感化を與へるのであるか、興味深きものを覺えるのである。又謡曲作者がよく源氏物語を理解しその時代の

ものとして殆んど新たな形に創作した事を見る時、流石同時代の知識階級の眞面目を發揮したものと云はざるを得ない。謡曲の多くが文學作品に純然たる根據を有してこれを時代精神によつて批判し新たな文學に再現した事は國文學上の大きな收穫と云はなければならぬ。

最後に當り私の氣の弱さからばかりではないが、これが單なるディレクタントイザムのフラツグメントでしかない事を云ひたいし、又私は如何にも源氏物語五十四帖を通讀してゐるかのやうに書いたが、實は北村胡春の「忍草」、北村久備の「すみれ草」に目を通したに過ぎない。

## 主観と客観

西林 忠俊

(上)

私は此の誌上に於て先づ主観と客観とを論じ、次で此の主観の客観に溢れる感情、即ち友、神等に就て考察する事にしよう。

斯の如き論文は抑々私の如き哲學的思索も乏しく、哲學的知識も甚だ曖昧な者が論すべき性質のものでは無いのであるが些か感ずる所あつて敢て筆を取つた次第である。

故に私の論点には笑止千萬な箇所が澤山あるかもしれない、又哲學的用語の不適當なものがあるかもしれない。

が而し斯の如き事に徒に小心翼翼としてゐては何も論ぜられない。誤謬思想の幼稚は讀者の批判に委ね「物言はぬは腹ふくるる」の諺もあるから、思ふ存分平常の僕の所信を此の誌上に發表して、頭に充滿する思想の重さを軽くするの覺えに與りたく思ふのである。

偕、私は此の章に於ては、主観と客観と友とを平行させて論じてみよう。

× × ×

我々人間は友、及び廣義の友、無くしては生活して行く事の出来ない動物である。廣義の友

とは「讀書を友とす」「孤獨を友とす」「異性を友とす」「戀愛」等の句に使はれる友を指して名付けたのである。人間が進化すればする程益々、斯の如き意味の種々の友が必要缺くべからざるものとなつてくる。此の事は生物界―殊に動物界―に目を向ければ容易に合点のゆく所である。而らば何故、人間は友を必要とするのか、何故友は人間生活に取つての、必須條件であるのか。

私は、考へてみるに、その根本を成せるものは主観の客観と合致せんとする感情に基因するのだと思ふ。

主のみでは不完全である。主は常に客を追慕して主客合一の状態にあらんとするのである。主は甚だ活動的であり積極的であるが、客は受動的な考へ方によつては主の想像物でさへあるのである。

偕主客の合一と言つても主観、客観に多くの考へ方の存する以上、主客合一と言ふ概念の意味は明白でない。其處で、主観客観の根本から考へて見なければならぬのであるが、Rickettが、此について、精妙に述べてゐるから、それを暫時、左に箇條書に書いて次の考察上の便宜としよう。

- (一) 心身を具備した主観を空間的に、之を圍繞する客観世界と對立せしめたる場合。
- (二) 心以外のものを、悉く客観とするものである。即ち内在的世界と外在的世界との對立を見た場合。

- (三) 我が意識内容を悉く客観とし之に對して此内容を意識する作用を主観とする場合。

主観、客観を色々の立場から考へて見ても大凡右の三種に盡きるであらう。尤も、最後に、あげた主観客観に對する解釋が最も進んだ考へ方である事は言ふ迄もない。此の事は更に後程詳説しよう。

諸今列舉した主観、客観の三種の解釋を番號通り夫々、(一)、(二)、(三)とし、以下述べる場合に此の符號を使用する事にする。

× × ×

先づ(一)の場合の主の、客に對する活動から始めよう。即ち身心を具へた我が我以外の世界に對する活動である。身と心とを全部率ゐて自分の身、心、以外の物に對する時である。

一般に動物は皆此の段階にある。人間も動物である故此の段階を脱し得ないのは當然である。此の場合に於ては我—身心を具備して—は無意識の中に社會生活を營んでゐる。此の我々の住む社會、國家が如何だ、斯うだ、と批判の俎上にのせて見ないのである。蟻の生活は此の意味の代表的な完全物であらう。

此の(一)の場合に於ける主の客に對する活動は動物の集團性となつて具現化される。斯う言ふと或者は「然し人間には侵略性もあるではないか」と問ふかもしれない。而し此の侵略性を今一段考へて見るならば、より大きく、より鞏固に集團せんとする爲の侵略だと言ふ事が合点出来るのである。社會、國家が比較的其時代に完全であれば此の(一)の段階で無意識に社會生活、國家生活を營むのである。若し彼等の住む社會、國家が彼等に取つて不完全なものであれば此處にその社會、國家は科學研究の對象となり、遂に其を扱ふ科學即ち社會科學が現れるのであ

る。而し之は次に述べる段階に屬するのであつて(一)の場合ではない。又一のみに止まつてゐるのは人間を除いた全動物であり、實に(一)の階段から(二)、(三)の段階へと進む所に人間の人間たる所以があるのである。而し人間も矢張り動物である限り此の(一)の段階も所有してゐるわけで、「人間は動物性を有す」とは此の事を指して言ふのである。而らば其が如何なる態様をなして社會生活上に現れてゐるか考へて見よう。

友に對しては形式的な興味を咬る感情が主であつて世に言ふ『酒食の友』も、此の中に入るだらう。—恰も犬と犬との戯れの様に女性に對しては單に肉の對象とのみ見做すのである。—恰も獸相互の交尾の様に、

戰爭、殘虐な行爲が行はれる。—恰も野獸の争の様に—。

つまり動物性の現れた段階である。前に述べた如く此の段階の主の客に對する活動は人間のみならず動物一般の共通な物である。

動物一般の物故、未だ人間に取つて何等の特異性をも示してゐないのである。人間をして人間たらしめるものは(二)、(三)の場合に於ける主の客に對する活動であると思ふ。其處で我々は(二)の段階に進まねばならない。

× × ×

此の場合には心對一切である。而し未だ心の心に對する場合ではない。心の外界事物に對する活動である。心が外界事物に對して活動すれば、科學の世界を構成する。所謂純粹な知の世界であり、隨つて科界の世界である。即ち心が心以外の全てのものを思考の對象とするのである。

近世に於ける急激なる物質文明の進歩、發展は實に此の段階の進歩發展を裏書するのである。何者をも容赦しない科學てふメスは一切を解剖した。自然科學、社會科學等の研究の發達隨つて其等の研究に因り必然に醸される人類の進歩は、實に近世に於ける『心對一切』の活動に歸因するのである。

偕、此場合に於ける、友—狹義の—に對する主の活動を考へて見よう。友と言つても人間である限り主と同じく肉と同時に心を具へてゐる。而るに此の場合にあつては相手の心をも肉と同一視するのである。—恰も草木に對する如く—。相手の心は主に對して、物質化され、固定化されたものである。即ち意氣相通すると言ふ事は未だ起り得ないのである。相抱き合つて感激にむせぶ美はしい友情も見られない。更に一般に人の人に對する場合を考へて見ると所謂奴隸時代の人の心であり高利貸の心である。冷たい科學のメスが輝いてゐる。

(一) と違ふ所は、靈肉對靈肉と、靈對靈肉との点にある。具體的に言へば前者は特定の人を造らないのである。一樣な社會人と見做すのである。而るに後者に於ては利益、不利益の考を抱き、愛憎の念を以つて人に對するのである。

x x x

偕、一番重要な(三)の段階を考察しよう。後で(一)、(二)、(三)の比較を論ずる積りであるが、此の(三)の段階は極少數の人間のみ進み得る境地である。

人間進歩の順序を考ふれば(一)、(二)、(三)の順序に人は進歩の跡を辿つて來たのである。偕、此の(三)に於ては心が心に活動するのである。心が主となつたり客となつたりするのであ

る。所謂思索、反省の時代である。哲學者、宗教家—眞の意味の—の住む境地である。

眞の人間出生は我が心をよく客觀視し得る時である。此の境地に徹底すれば獨居しても孤獨でない。斯ういふ人にとつては『大なる都會こそ大なる孤獨の地』かもしれぬ。「孤獨を友とす」とは抑々之を物語らずして何をか物語らんである。斯く考へて見れば絶對の孤獨はあり得ないのである。我等が孤獨と思つてゐるのも眞の孤獨ではない。客視し得る心があるのである。此意味に於て、絶對の孤獨は神のみ達し得る境地だと言へよう。

此の場合に於ける友は如何かと考へて見るに、此の場合の友こそ眞の友であると思ふ。所謂意氣相投する友である。主の心が客の心に働きかけるのである。即ち客の心は主の心となり、主の心は客の心となつたりして、主は倍加されたり半減されたりするのである。喜憂を分つ友とは斯様な友である。即ち「喜びを友に打明けて一緒に喜べば我が喜びは倍加し、我が憂を友に打明ければ我が憂は半減する」といふ友である。而らば何故、主の心の倍加されたり、半減したりする事は可能であるか考察しよう。

先づ意氣相投する友とは御互に心の通へる友を言ふのである。相手の心は主の心の中にもある。而らば、主の喜びを友に語るときは同時に主の心の中にある友の心に語るのである。故に我々は喜びを倍加されるのである。

では何故半減するかと言ふに、我が憂を友の心中にある我が心に移すのである。故に憂は半減されるのである。即ち前者は我が心の中に客の心を容れ、後者は客の心の中に我が心に移すのである。「友人とは、もう一人の自分自身である」と言ふ諺は、上述の意に解して寔に正鵠

を得たものであると思ふ。而るに、世には斯かる友は、願ふべくして願はれないのである。此處に宗教は躍如たる活動を見せるのである。「人格化された神」は、全て斯様な心理より起るのであらう。さればこそ我が心の中に神の御聲を聞く事も出来るのである。我が喜びを神に感謝し、悲しみを訴へるは實に此の消息を語るものである。

網島梁川は、その著「病間録」に於て「絶對的懷疑を白眼の徒は言はず苟くも嚴肅なる一念を以て人生を觀じ、其の眞摯なる努力を泡沫の夢となさざる限り何人か暗々の裡吾が心之天に眞認識、眞評價の知己を求めて、ここに究竟の安心を托せんとはせざる。自家妍媸自家知。而して吾が心之天に訴ふる心ぞ是れ取りも直さず神に知らるるを願ふの心となる……」。自己の價値及び要求に對する眞自覺と、神に知られたる心とは所詮離れたるものにあらず。一は主觀に匯し、他は客觀に溢れたる也。古人が浩然天地の間に塞がると言ひしは此の主觀信の客觀信に溢れたる心也。」と言つてゐるのも煎じ詰めれば、私が前述した事と略々同じ事を言つてゐるのである。

カーライルはルーテル論中の偶像崇拜について

“We may say, all Idolatry is comparative, and the worst Idolatry is only more idolatrous,”  
と言つてゐるが此の偶像崇拜の最悪最善への徑路は、主、客の(一)、(二)、(三)の徑路を辿るものであると思ふ。

此の章を終るに及び最後に一言したいのは情の問題である。以上の如く私が宗教心の源を論ずるならば、或者は其を駁して、宗教は情より起るのだと解するかも知れない。成程宗教は情

より起る。而し情とは主の客を求むる活動心を指すのである故、上述の如く言つてもよからうと思ふ。同時に主、客三態に應じて情は表れるのであるから、下等、上等の情も之等より起因するのである。故に最高の信仰とは上等の情、即ち(三)の場合に於ける心を對象としたもので、カーライルの言ふ「偶像性の一少しいもの」を言ふのである。

(下)

以上前章(上)に於て(一)、(二)、(三)に互つて、不完全乍ら主、客、友を論じて來た。其處で此の章に於ては少しく立場を變へて小見出の下に主觀、客觀の前述の應用を企て、見よう。

### (一) 人智の限界

近世に於ける科學の發表は、遂に科學萬能の時代を現出した。嘗て神祕的だと考へられた物もその正体を暴露され、人智の進歩は燎原の火の如く、全てを科學の俎上に乗せた。而し人智は何處迄進歩するか？ 科學は全てのものを解剖し得るか？ 猿—人間—超人(此の場合の超人は現在の人間より進化した人間を指す)と進化し得るか？

夏目漱石はその著文學評論に於て科學の取扱ふ領域を論じ、科學は how の問題を解き得るのみで why の問題は解き得ないと言つてゐる。

更に論を進みて文學は科學と異なり感情のエクスペンションであると述べてゐる。

實に科學は how の問題を解き又解きつゝある。而し why の問題は永久に解き得ぬのである。備、私は此の問題を主觀、客觀より論じて見よう。

生物の活動は全て(一)より始まる。而して(一)より(二)へと進化し(二)より(三)へと進化する。

而して主、客對立の場合我々は(一)、(二)、(三)以外の場合を考へ得ないのである。而して思想の進歩發達と雖も、實は主の客に對する鋭敏さが經となり(一)から(三)へ移る過程が緯となるに過ぎないのである。

前者に於ては主により研究の對象とされる客は極度の進歩發展をするに違ひない。即ち(二)の場合にあつては社會、國家の理想―戰爭、殘虐、革命、暴動のない平和な社會、國家―が實現せられ、科學は極度の發達をなし how の問題は悉皆答へられるであらう。

(三)にありては純粹な知の問題を離れ所謂心、感情の問題が進歩發展するのである。而し之も對象物の研究である。哲學体系は最早崩壊せぬ永久の眞理となり宗教に於ては、世界の人が皆夫々異なつた宗教を持ちつゝ、或る共鳴を感じるに至るであらう。而しそれだけである。それ以上は望めないものである。人智の世界は斯様なものである。人間には發展の限度があるのである。人智の全貌は斯様なものであつて今後幾萬年後の人、或は人の社會と雖も大体の想像はつくだである。

“The Rivers run into the sea; yet the sea is not full. There is no new thing under the sun.”

## (二) 再び友を論ず

友に就ては可成り詳しく上述したが、もう一度考へて見よう。主と客とはその性質上平衡の地位にあるべきである。何故なれば主は客に對して活動するからである。主の偉大なる者に取つては客も亦偉大とならざるを得ない。孔子が「知我者其天乎」嘆息したのは孔子の主が偉大であつた爲、働きかけられる客たる友も人以上の者となつたのであらう。即ち人心の進むにつ

れ友は次第に理想化され終局に於て神となるのである。即ち之を最上の友とする。孔子の「知我者其天乎」は以上の事を如實に證左してゐるのである。

次に友の必要を書いた小説を見るに、その代表的ものは菊池寛著の「忠直卿行狀記」である。殿様の位の爲臣下が友達として交はつてくれない。それが原因となつて生じた事件を小説にしたのが此の「忠直卿行狀記」で、如何に友は人間にとつて必要であるか如實に描寫されてゐる。ベーコンはその隨筆集に於て五、六の例をあげて次の如く言つてゐる。

「かゝる交友の効用について、偉大な王や君主等がどんなに高い價值を認めてゐるかを考へて見ると不思議な位である。彼等は屢々自身の安全や偉大さをも賭して之を購ふほどである。即ち王侯は自分の身分がそれと甚だ隔つてゐる故、この效用を享けんがためには、或る者を引き擧げて云はば自分の伴侶の様にし殆んど自分と對等の者にしなければならぬのであるが、さうする事は多くの場合不都合を醸す事になるのである。かういふ待遇を受ける人々に對して近代の國語は寵臣とか丙輪の友とかいふ名を興へる。……彼等は屢々自己の臣従の或る者を近づけ、普通の人間の間にとり交される言葉をを用ひて之を我が友と呼び、又第三者にも同様にさう呼ぶ事を許したのである。」

「忠直行狀記」と併せ考へて見て甚だ興味がある。

## (三) 歴史事件はその當時の社會が作つたか、個人が作つたか

或は事件はその當時の社會が斯く然らしめたのか、將又個人が然らしめたのかは古來からの大問題である。

トルストイは「戦争と平和」に於て此の問題を論じ、個人即ち英雄が或る事件を惹起させた  
と説を極力否定してゐる。又ルソー先生は「エミール」に於て「隠れた力を」重要視してゐる  
のも矢張り社會の力を指してゐるのであらう。

而らばトルストイ、ルソー等の説が正しいかと考へて見ると必ずしも頷く事は出来ない。若  
しトルストイ、ジャン・ジャック・ルソー先生の如く論ずるならば、人間は社會、環境の動物た  
るに過ぎなくなる。「存在が意志を決定するのであつて、意志が存在を決定するのでない。」と  
いふマルクスの唯物史觀を承認せねばならなくなる。若しマルクスの唯物史觀が眞ならば我々  
人間は悲觀すべき状態にある。何故ならば『我』とは我でなくて、限定され固定化された變化  
のない我となるからである。我々はどうしても個人の力を認めねば落着く事が出来ない。

此處で再びカーライルの文を例に取らう。

He learns with the mind given him what has been; but with the same mind he discovers  
further, he invents and devises somewhat of his own. Absolutely without originality there  
is no man.

嗚呼何たる警句だらう。カーライルの血は言言、句句に表れ、幾星霜後も暖かいその血はさ  
めないであらう。

今之を主觀、客觀から考察してみよう。

(二)によりて主は外界の客に對して交渉がある。即ち此處では、人間は社會、環境的動物であ  
る。而るに有難い事には(三)の場合が嚴存してゐる。故に(三)の境地に達してゐない下等な人間は

駄目だが(三)の境地に達してゐる者に取つては(三)の存在は正に神の存在である。

即ち此處に於ては自分の心を思考の對象とするのである。前者の心は外界と關係がある。影  
響された心である。而るに後者の心は永久に前者の心を批判しつゝ我々にとつて捕捉し得ない  
ものである。而も活潑潑地と活動してゐるその心、何者にも影響されないその心、嗚呼！此  
の最後我の貴さよ、我々は此の最後我ある事によつて獨立の人間たる事が出来た。最早我々は  
社會、環境の奴隸でない。

實に歴史を作るのは各人の斯る主觀の活動であつて、社會環境は此の活動により働きかけら  
れるものである。更に此の活動は同種の者が集合し一社會が活動体となつて他の社會と戦ふ事  
もある。再びカーライルを引例しよう。

It is the history of everyman; and in the history of mankind we see it summed up into  
great historical amounts,—revolutions, newepochs. (Itは各人の originality を指す)

(十一・十一・十九)



繖

譯

# 幻滅の日

フリードリッヒ・ゲルシュテナーカー作  
佐 口 透 譯

一八四×年の秋、一人の逞ましい青年がリュック・サツクを背に負ひ、手に杖を持ち、ゆつくりとした心持よげな足取でマリスフェルトからヴィヒテルハウゼンへ續く國道を歩いて居た。

彼は仕事を求め乍らあちらこちら旅をして歩き廻つて居る職人の徒弟ではなかつた。彼のリュック・サツクに結びつけられて居る体裁よく作られた皮革の紙挟みでも先づちらつと見れば彼の職業が何であるか分つたであらう。彼が畫家である事は確かに疑ひは無かつた。

彼は黒い縁の廣い帽子を氣取つて横つちよに傾むけてかぶつて居た、そして彼の長いブロンドのカールした髪、柔らかで澤山あるが若々しい髭、又太陽の輝いてゐる暖かい朝には彼にとつて幾分厚過ぎる位に思はれる少し磨切れた黒いビロードの上衣——すべてこんな物が彼が畫家である事を物語つて居た。彼は上衣のボタンをはづした、そして一番下の白いシャツの首の廻りは（彼はチョッキを着て居なかつたのだが）黒い絹のネクタイが僅かに弛んで居るに過ぎなかつた。

彼がマリスフェルトから一哩位の所に來たと思はれた頃、村の教會の鐘が鳴り響いて來た。彼は

立ち止まり、ステッキに靠れ鐘の満ち／＼た音調に熱心に耳を傾むけて居た。鐘の響きは微風を通じて彼に驚く程心持よくひびいて來た。

鐘の音はもう止んでしまつたが、それでも彼は依然として立つて夢を見て居る様に丘の傾斜の上を凝視して居た。彼の心はタウナス山脈の中の懐かしい小村の母や姉妹などのいとしい人々の居る故郷に走つて居た、そして恰かも涙が眼におしよせて來る様に見えた。

しかし彼の明るい陽氣な心情は悲しい憂鬱な考への侵入して來るのを卻けた。彼は只帽子を脱いで故郷と思はれる方向へ振り愉快な微笑ましい挨拶を送つた。それから頑丈なステッキを更にしっかりと握つて、彼は朗らかに道を歩き始め、既に始まつて居た旅を續けた。

その中に太陽は非常な暖かさで塵埃で厚く蔽はれて居る幅の廣い單調な國道に照り始めて居た。そして此の旅人は以前から暫らく、右へ左へと眼を向けてもつと氣持のよい道がないものかと物色して居たのであつた。

或る地点で道は成程右へ岐れて居たが、併しそれは彼に取つて前途有望では無い様に思はれた。その上、その道は彼の歩いて居る道からずつと遠く脇へ離れて行く様に思はれた。それで彼は暫らくの間、もとの道から離れないで歩いて行つた。そしてとう／＼清い澄み切つた山の小川へやつて來た。その川の上には古い時代の石橋の跡が認められた。

向ふ側のずつと遠くに草の生えて居る道が走り遙か谷の方へ續いて居た。それで心の中には別にはつきりした目的もなく——と云ふのは彼は只自分の紙挟みの中味を豊富にする爲、美しいヴェーラ峽谷を通つて居るのに過ぎなかつた——彼は靴を濡らさぬ様に大きな石から石へと傳つて小川を

横切つた、そして向ふ側の短かく刈り込んである牧場に着いた、そこから彼はこんもりとした赤楊の茂みの蔭の下のジメ／＼した芝生をすばやく進んだ、そして景色の變化して居るのに大變満足を感じた。彼は微笑みながら獨り言を云つた。

「さて、良い場所へ来たもんだ、何處から先に行つてよいか全く分らんとは。次の村の名を指し示すあの道しるべがないのだな、それでどうしても道を間違へてしまうのだ。一休此の地方の人は一時間の道のりを何う云ふ風に計るのだらうかな。」

此の峽谷は全く静かだ—實際日曜日には百姓は外で何もする仕事もなく、そして彼等は一週間鋤の後ろで歩き廻り、荷車を引張らねばならんから、彼等は日曜になつても散歩に出かける事を餘り氣にしないのだ。彼等は何はさて置いて朝は教會の中で睡眠の不足を補ひ夕飯が済んだら居酒屋のテーブルの下にうんと足を伸ばすのだ。酒屋か！ ふん！ 此の暑さにはビール一杯は悪くはないな。だがその前に此の清い小川の水が充分私の渴きをわやしてくれるだらう。」

かう云つて彼はリュック・サックと帽子を投げ下ろして水際に膝をつき、心ゆく迄水を飲んだ。

幾らか冷された氣持になつて、彼の眼は一本の奇妙にねぢれた柳の老樹に注がれた、そして素早く熟練た手つきでそれを寫生した。それからゆつくり休み、氣分を一新して、元通りリュック・サックを取り上げて、道が何處へ續いて居ようとそんな事にはお構ひなしに歩きつづけた。

彼はこんな具合に一時間ばかり放浪らつて居た。そしてスケッチ・ブックに此方の斷崖を描き止めるかと思ふと又あちらの赤楊の木の奇妙な枝ぶりやでこぼこした椹の枝を描いたりした。その中に太陽は段々高く昇つて來た、そして彼は足取を早め、丁度次の村で晝食時を逃さぬ様にと決心し

て居た。その時彼の眼の前の谷の中の小川の傍ら、昔聖廟が立つて居たと思はれる古い石のそばに、彼は一人の農夫の娘を見つけたのであつた。そして彼女は彼の歩んで來る道を見つめて居た。

彼は赤楊の木の蔭に隠されて居たので彼女が彼に氣づく前に彼女を見る事が出來た。併し小川の堤に沿うて、彼が今迄彼女の視野をさへ切つて居た茂みを通り抜けるや、彼女は歡喜の叫び聲をあげて彼の方へ躍る様にして走つて來た。

此の青年畫家は、アーノルトと云ふ名だが、驚いて立ち止まつた、そして間もなく見慣れぬ大變美しい農夫の衣裳を着飾つた十七位の美しい少女が腕を擴げて彼の方へ走つて來るのが眼に入つた。

アーノルトは彼女が自分を誰かと間違へたので此の歡喜に溢れた迎へが自分に對するのではないかと云ふ事を直ちに知つた。そしてその少女は彼を認めるや恐れを懷いてびたりと立ち止まつた。

初めは蒼白になつたがやがて赤くなり、とう／＼恥づかし相にもぢ／＼して云つた。

「御免なさい、旅人さん。私—私の思つて居たのは——」

「貴女の戀人なんでせう、娘さん」

と青年は笑つて云つた。

「そして異つた面白くもない風來坊が貴女に出合つたのに間違つて居るんですね。僕が彼でなからと云つて腹を立てないで下はさよ」

「まあ！ そんな事！」

と少女は當惑して呟やいた。

「怒つて居るのですか。あ！でも私がどんなに喜んで居たか貴方が御知りになつたら」

「ぢや確かにその男は貴女が最早待つ價值がないのですね」

とアーノルトは云つた、彼は今始めて優さしい百姓娘の驚くべき魅力に氣がついた。

「僕が貴女の戀人の代りだつたら貴女は一瞬間も僕を待つ必要がなかつたでせう」

「變な事おつしやいますわ」

と赤くなつて少女は云つた。

「もしあの人が本當に來るのなら、今迄にとつくに來て居る筈なんですわ。もしかしたら病氣かしら、それとも——」

と彼女はゆつくりと心の底から溜息をついてつけ加へた。

「で、その人から最近便りがないのですか」

「え、ずつと前から」

「そんなら彼の家は此處から遠いのですか」

「ずつと遠いつて？ え、さう。ここからとても遠いよ。ビシヨルスローダなの」

と少女は云つた。

「ビシヨルスローダだつて？」

とアーノルトは叫んだ。

「僕は極く最近其處で四週間過ごして來たのですよ。それで村中の若者を知つてますよ。何とい

ふ名ですか」

「ハインリツヒ——ビシヨルスローダの村長の息子のハインリツヒ・フォルグウト」

「ふん」

とアーノルトは考へた。

「僕は村長の家へ出入りして居たが僕の知る限りでは彼の名はポイエルリンクだつた、そして村中でフォルグウトと云ふ名は聞かなかつたがなあ」

「でも多分貴方はその村の人を全部御存知ぢやないんですわ」

と少女は云つた。そして彼女の美しい顔を曇らした悲しい表情に柔らかな腕白さうな微笑がかすかに漂ふた、そしてそれは以前の憂鬱さよりもつと彼女によく似合ふのであつた。

「だが併しビシヨルスローダから山を越えて容易すく二時間、精々で三時間で來れますよ」

とその青年は云つた。

「でもあの人は未だ來ないのですわ、私とあんなに固く約束したのに」  
と少女は又深く溜息をついて云つた。

「そんなら彼はきつと來ますよ、何故つて誰でも貴女に一度約束した以上それを守らなかつたら、無情な心を持つて居るのです——そして彼はきつとそんな無情な事はありませんよ」

「え、」

と彼女はきつぱりと云つた。

「でももう私はこれ以上待てないわ、御飯に家へ歸らねばなりません、さうでないと父に叱られますわ」

「御家は何處ですか」

「あの谷の丁度下の方、あれ、鐘が鳴つてますわ。皆な教會から出て来るのよ」

アーノルトは耳を傾けた。そして遠からぬ所からゆつくりと鐘の鳴り響いて来るのを聞いた。併しその音は彼に深みのある満ち／＼としたものに聞えず、軋つた不調和な音に聞えて来た。そして彼が眼をその方向へ向けた時、彼に恰かも濃い山の霧が谷のその部分を蔽うて居るかの様に見えた。

「此の村の鐘にはひびが入つて居て、本當の音が鳴りませんね」

と彼は笑つて云つた。

「え、さうですわ。愉快な音ぢやありませんわ。ずつと前に鑄直す筈でした。

でも私達は何時もお金や時間がないのです。と云ふのはあの邊には鐘を鑄直す人は居ないですもの。でもそんな事は問題外ですわ。私達、その鐘をいものだと思つてますわ。そして鐘が鳴る時何を意味して居るか知つて居ますわ——だからひびが入つて居ても充分役に立ちますわ」

「そして、貴女の村は何と云ふのですか」

「ゲルメルスハウゼン」

「そして其處からヴィヒテルハウゼンへ行きますか」

「樂に行けます。小道では半時間——たしかそんなにかからない筈ですわ、貴方が足がお達者な

ら

「ぢや僕、貴女と一緒に村を通つて行きませう。娘さん！そして良い宿があつたらそこで御飯を食べる事にしませう」

「宿はとも良いわ」

とその乙女は溜息をついて云つた、そして彼女の待つて居る戀人がやつて來ないかと後ろの方をちらりと眺めた。

「宿はそんなに良すぎる程ですか」

「え、お百姓にとつては」

と少女は眞面目に云つて彼の傍を谷に沿うてゆつくりと歩いた。

「晩仕事が済んでから百姓は家で澤山仕事がありますわ。そして夜遅く迄居酒屋で腰を落着けて居ると此の仕事を怠けるの」

「併しとにかく今日僕は仕事を怠ける事はないんですよ」

「え、町の人はそれと又違ひますわ。町の人は何も働く事がないんですよ。それで怠ける事も澤山ないのです。併しお百姓は自分自身でパンをか세가ねばなりませんわ。」

「成程さうだが本當は違ひますよ」

とアーノルトは笑つて云つた。

「農夫は栽培しなくちやならないと云ふ事は分ります。併し僕等町の人間も自分自身で稼がねばならないのです、そして屢々とても難かしい仕事です。と云ふのは百姓は働く事に對して充分報いられて居るのですから」

「でも、どうやら貴方はお働きにならない様に見えますわ。」

「どうしてですか」

「貴方の手はそんな風に見えせんもの」

「そんなら僕が何う云ふ具合に仕事をし何をするか御覽に入れませう」

とアーノルトは笑つて云つた。

「あのリラの老木の下の平たい石にお掛けなさい」

「其處で何うするの」

「まあ、御坐り」

と青年畫家は叫んだ。そしてリュック・サックを投げ出してスケッチ・ブックと鉛筆を取り出した。

「でも家へ歸らなくちや……」

「五分間で仕上げます。貴女の思ひ出を世の中へ持つて行き度いのです。」

貴女のハイニンリツヒが反對しなければよいのだが。」

「私の思ひ出？ まあ、をかしな人ですわ。」

「僕は貴女の肖像畫を描いて行き度いのです。」

「ぢや貴方畫描きさんなの。」

「そうです」

「まあ素敵！ そしたら貴方はゲルメルスハウゼンの教會の壁畫に取りかかつて完成して下さいば宜いのですけど。教會の壁畫はとても貧弱で見すばらしいんですわ。」

「貴女のお名前は何と云ふんですか」

と云ふのがアーノルトの次の問いであつた。

彼はその中に畫板を開いて素早く少女の美しい顔をスケッチして居た。

「ゲルトルトよ」

「貴女のお父さんは？」

「村長よ。貴方が畫描きさんでしたら宿へ行かなくてもいいわ。私、すぐに家へ連れて行つて上げます、そして御飯が濟んだらお父さんと其の事について相談出來ます。」

「あゝ、教會の壁畫ですね」

と笑ひ乍らアーノルトは云つた。

「勿論ですわ。」

と少女は眞面目に云つた。

「それから貴方は私達の所に長い長い間滞在して下さい、私達の日が再び來て畫が出來上る迄ね。」

「結構です。後程御相談ませう、ゲルトルトさん」

と青年畫家はその間忙しさに鉛筆を動かし乍ら云つた。

「併し僕が絶えず貴女のそばに居て貴女と色々話をする様になつたら貴女のハインリツヒは怒りやしませんか。」

・「ハインリツヒ? もう来ないわ」

と彼女は云つた。

「今日来なくても恐らく明日来るだらうね」

「うん」

とゲルトルートは静かに云つた。

「十一時迄に来なかつたら、あの人は私達の日が来る迄離れて居らねばならないのです。」

「貴女方の目つて? それ、何の事ですか。」

少女は大きく開いた眞面目な眼で彼を眺めたが彼の問ひに對し答へなかつた。そして彼女の視線は二人の頭上に高く浮んで居る雲の方へ向いて奇妙な苦惱と憂鬱の表情がそれに結びつけられた。

此の瞬間のゲルトルートの美しさは本當に天使の様な美しさであつた、そしてアーノルトは畫の完成への關心の外總べてを忘れた。併し又彼にはもう幾許の時間も残つて居なかつた。乙女は突然立ち上つた、そして太陽の光りを遮蔽<sup>おほ</sup>ぎる爲ハンカチを頭の上にかけて云つた。

「私、歸らねばならないの。日は短かいのですし家では皆待つて居ますから。」

併しアーノルトは一枚の小さな畫を仕上げて居た。そして力強い線で彼女の着物の襷を書いて彼

女にスケッチ畫を差し出して云つた。

「よく似て居ますか」

「まあ! 私とそっくりですわ。」

とゲルトルートは怖れながら喘いで云つた。

「貴女でなくてどうしますか」

とアーノルトは笑つた。

「そして貴方はその畫をしまつて持つて行くの」

と少女は殆んど欲しさうにそして恥づかしさうに云つた。

「勿論ですよ」

と青年は叫んだ。

「そして僕が此處から遠く〜に居る時貴女を何度も強く〜思ひ起しますよ」

「でもお父さんが許すでせうか」

「許すですつて? お父さんは僕にさう命ずる事が出来ますか」

「いいえ—でも貴方と一緒にその畫を持つて行くつて—町へ持つて行くなんて—」

「お父さんは僕を止める事が出来ませんよ。」

とアーノルトは優しく云つた。

「併し貴女の畫が僕の物である事がいやなんですか」

「あたし？ ううん」

と暫らく考へて答へた。

「只―私はそれについてお父さんに聞かねばならないの」

「何て馬鹿な子だね、貴女は」

と笑ひ乍ら青年畫家は云つた。

「お姫様だつて藝術家が自分の爲にお姫様の肖像をスケッチする事に反對しないでせう。別にそんなに悪い事はありませんよ。だが、どうかそんなに逃げないで下さい。元氣な子だなあ。貴女と一緒に行きませう、ね―。それとも貴女は御飯を食べさせないで置いて行くつもりですか。教會の壁畫の事を忘れたのですか」

「おゝ、さうだつたわ、繪の事。」

と靜かに立ち止まり彼を待ち乍ら少女は云つた。併しアーノルトは素早く紙挟みを元通りに疊んで居たので、直ぐに彼女とならんだ。そして二人は前よりもつと早足で村の方へ歩き続けた。

併し村は、あのひびの入つた鐘の音で想像して居たよりつと近かつた。と云ふのはその青年が遠くから赤楊の林だと思つて居たのはつと近づいて見ると垣で取りかこまれた一列の果樹である事が分つた。此等の木に隙間なく隠され、しかも北側と北東の側を廣い畑で圍まれて、低い教會の塔と煤で黒すんだ田舎屋のある古い村が横たはつて見えた。

此處は又兩側に果樹を植ゑてある、しつかりとした街路に二人が始めて入つた所であつた。併し村の上空にはアーノルトが已に遠くから認めて居た濃い霧が低く垂れ籠めて居て、輝かしい太陽の光を薄暗くして居た。そして太陽は氣味悪い黄色がかつた光で灰色の古い風雨にさらされた屋根の上に落ちて居た。

併しアーノルトは之に對して殆んど眼を向けなかつた。ゲルトルトは彼の傍へ歩み寄つて彼等が初めての家に差しかかつた時、優しく手を彼の手にすべらして彼の腕を抱き次の通りを廻つた。

彼女の暖かい腕に觸れて、ある不思議な感情が此の元氣な青年のからだにぞつと沁み込んだ。そして殆んど我を忘れて彼の眼は若い少女の眼を見ようとした。併しゲルトルトは彼の見て居る方へ向かなかつた。度ましく眼を地面の上に落して彼女はお客を父の家へ案内した。そしてアーノルトは彼の遇つたどの村人も彼を通り過ぎる際黙つて居て一言も挨拶の言葉を交はさないと云ふ事に氣がついた。

アーノルトは始め此の事に氣を惹かれない譯には行かなかつた。と云ふのはどの近隣の村でも旅人に少くとも「今日は」とか「御氣嫌よう」と云ふ言葉を言はないならば殆んど罪の様に考へられたであらうから。此所では誰もこんな事を考へては居なかつた。丁度大きな町の様に人々は黙つて通り過ぎるか又何等關心を示さないうで通り過ぎた。でなければあちらこちらに立つて見送つたりした。併し誰も彼等に一言も話さなかつた――通行人の中一人としてその少女に挨拶をした者はな



つた。

そして古い家々は何と奇妙に見えた事であらう。曲つた木細工で飾られた破風の付いて居る、難かしさうに葺いてある茅屋根は風雨に磨り切られて居た。そして日曜であつたのにも拘はらず窓一つとして美しく磨いてなく鉛のわくを取りつけた圓いガラス窓は曇つて居て、その鈍い面の上にはきら／＼光つて居る虹の七色が現はれて居た。

二人が歩いて行くにつれて、あちらこちらで窓が開いて綺麗な顔の少女や相當の年の偉らさうな主婦が覗いた。人々の奇妙な衣裳も亦彼の心を惹いた。着物は附近の村のと本質から異つて居た。そして此の外殆んど音の無い静寂が到る處に廣まつて居たので此の沈黙の状態がとう／＼重苦しく感じられて来て、アーノルトはゲルトルートに云つた。

「貴女方の村では日曜をこんなに嚴肅に守つて道で出合つてもお互ひに一言も挨拶の言葉を交はさないのですか。もし時々犬一匹も吠えず鶏一羽でも鳴くのが聞えなかつたら本當に村中が啞で死んで居る様に見えるでせう」

「御飯の時なのです。そして皆んなその時は話す事を好まないのです。今晚皆んな大騒ぎするのでお分りになりますわ」とゲルトルートは物靜かに云つた。

「有難や」

とアーノルトは叫んだ。

「町の向ふの方でどうやら子供が數人遊んで居るぞ。僕は全く不思議に感じて居た。ビシヨルス

ローグでは日曜を全く異つた風に送りますよ」

「父の家が見えますわ」

とゲルトルートは低い聲で云つた。

「併し私、御飯の時間にこんなに突然にお父さんの邪魔出来ませんわ。私はいやな侵入者と思はれるかも知れません。私、御飯の時は、まはりに睦まじい顔が見たいのですわ。」

「だから寧ろ宿を教へて下さい。娘さん。でなけりや僕自身でさがして下さい。多分ゲルメルスハウゼン村でも他の村の習慣や規則と異ふ事はないでせう。概して宿は教會の極く近くにあつて教會の塔を目當にすれば間違ひなく行けるでせう」

「それはいいわ。それが丁度私達の場合だわ」

とゲルトルートは靜かに云つた。

「でも皆私達を家で待つて居ます、そして貴方は温かみのない歓迎を受ける事を心配なさらないわさうわ」

「私達を期待して居るつて？ 貴女とハインリツトの事でせう。そう、ゲルトルート、もし貴女がハインリツトの代りに僕を連れて行くのなら、僕は貴女が歸れと云ふ迄貴女と一緒に居ませう」

彼は此の最後の言葉を殆んど自分の意志に反して迄全く感情の溢れた言葉で話して居た。そしてその間自分の手を握つて居る彼女の手を優しく抑へたのでゲルトルートは突然止まつて大きな眞面目さうな眼付で彼を眺めた。

「貴方は本當にさう思つていらつしやるの。」

「え、とても嬉しいんです」

と青年畫家は少女の驚く程の美しさに全く魅惑されて叫んだ。併しゲルトルートはこれ以上言葉を返さなかつた。そして恰かも同伴者の言葉をよく考へ込んで居るかの様に黙つて進んだ。そしてとうとう大きな家の前で立ち止まつた。それは鐵の手すりで護つてある幅の廣い石の段で上方へ續いて居た。以前の恥かし氣な臆病な様子でゲルトルートは話し乍ら再び云つた。

「あなた、之が私の住んで居る家です。そして宜う御座いましたら私と一緒に父の所へいらつしやい。父は疑ひなくテーブルの所で貴方にお目にかかる事を光榮と思ひますわ」

II

アーノルトが此の招きに何とも答へぬ中に村長自身が階段の上の戸口に現はれた、そして窓が開け放されて、そこから親切相な老婦人の顔が現はれて彼等にうなづいた。

「お、ゲルトルートや、今日は長い間外出して居たのぢやな、そしてこれは何とハイカラな若者を一緒に連れ來た事だわい。」

と百姓が叫んだ。

「今日は」

「どうか階段の上で遠慮なさるな。プディングが出来て居ますよ、さあお入り、固くなつて冷たくなるといけないから」

「でもあれはハイインリツヒではありませんね」

と老婦人が窓から叫んだ。

「それ、私はあれがもう決して歸つて來ぬと云つたぢやありませんか」

「S.S.よ、S.S.よ、お母さん」

と村長が云つた。

「その代り此の男で結構だよ」

そして旅人の方へ手を差し延べて云ひ續けた。

「お若い、此の娘が何處で貴方を御連れしたか知らんが、ようこそゲルメルスハウゼンへいらつしやいました。さあ中へ入つて御飯をたら腹めし上つて下さい、他の事は後からお話する事として。」

彼は青年畫家に斷る機會を與へなくしてしまつた。併し、ゲルトルートが段にさしかかると先離れた畫家の手を力強く握り、親しみを見せて彼の腕を取り廣い居間に案内した。

家を閉め切つて新鮮な空氣を入れずしばし夏に於てすらも百姓が非常に喜ぶ焼くが如き暑さを作る爲火を保つて置くドイツ農民の習慣を彼はよく知つて居たけれども、彼が直ちに氣づいた事は家の中に満ちて居る微びた土臭い雰圍氣であつた。

狭い入口の廣間は人を招き入れるどころではなかつた。漆喰は壁から落ちて居て丁度今しがた一方の側へ掃かれた形跡があつた。廣間の後部の只一つの薄暗い窓は殆んど充分な光りを入れなかつた。そして二階へ續いて居る階段は古くさくて修繕されて居ない様に見えた。

併し乍ら彼がすべてこんな物を見るのに暫らくの餘裕はあつた。と云ふのは次の瞬間歡待して呉れる此の家の主人は客間の戸をぱつと開けた、そしてアーノルトは天井は低いが大きな廣々とした室へ入つた、そしてその室は空氣の流通が良くて新鮮で、白い砂が床の上に敷いてあり中央に大きなテーブルがあり雪のやうに白いテーブル掛が擴げられて、家の稍荒れた備付品と心持よく對照して居た。

窓を閉ぢて椅子をテーブルの方へ動かした老婦人の外、隅の方には二、三人の林檎のやうな頬をした子供も亦腰かけて居た。そして近所の村のとは全く異ふ衣裳を着て居た丸ぼちや顔の百姓女が、大きな皿を持つて入つて來た下女を中に入れる爲に戸を開かうとして居た。

そして今や食卓の上ではブツディングが湯氣を上げて居て誰も彼もそのおいしい御馳走に與からうと椅子の用意をした。併し誰も坐らなかつた、そして子供達は、アーノルトにはさう見えたのだが、彼等の父に殆んど心配さうな眼差を注いで居た。

家の父親は自分の椅子の方へ近より腕をそれにもたれかけて啞のやうに黙り込んで、陰鬱さうにさへして床を見つめて居た。彼は祈つて居るのだらうか。アーノルトは彼が唇をしつかり結んだまま拳を握つた右手をだらりと下げて居るのが見えた。彼の面持には祈禱の様子はなかつた。只あるものは頑固なしかも躊躇して居る反抗の面持のみであつた。

ゲルトルトはそれから靜かに彼の方へ向いて手を彼の肩に置いた。そして一方老婦人は話しもせず彼の反對側に立つて熱心に歎願して居るやうな目付で彼を見た。

「食べよう、——そんな事をして居ても仕方がないと思ふ」

と父はうなるやうに云つた。そして椅子を脇へやつて客にうなづきどつかりと椅子に腰掛けて大きな柄杓を握つてすべての人に一もりづゝ給仕をした。

アーノルトに取つてその男の仕草は殆んど不思議に思はれたし又彼は他の人々の陰氣な氣分の中に居て心持よく感ずる事も出来なかつた。併し村長は憂鬱な事を考へながら食事をするやうな男ではなかつた。彼がボタンとテーブルを叩いた音に應じて女中は酒のびんとグラスを持つて又入つて來た、そして彼が注いだ上等な古い葡萄酒をきつかけに前と全く異つた、もつと愉快な氣分が間もなくテーブルの周圍の人々に擴がつた。

その上等な飲物はアーノルトの血管の中を液火のやうに駆け廻つた。今迄に彼はこんなにうまいものを味つた事はなかつた。ゲルトルトも亦少し飲んだし老婦人も亦飲んだ。そして老婦人は後から隅の紡ぎ車の所に腰を下ろして低い聲でゲルメルスハウゼンの楽しい生活を讃へる小唄を歌つた。村長自身は以前とは全く異つた人間のやうに見えた。

彼は以前に眞面目さうに黙つて居たので今度こそは彼も暢氣になつた。そしてアーノルト自身も上等な酒の爲に酔はない譯には行かなかつた。

どうして村長がそんな氣分になつたのかよく分らなかつたのだが、手にヴァイオリンを取つて居た、そして愉快なダンス曲を弾いて居た。そしてアーノルトは腕をゲルトルトの腰に廻して室を狂氣のやうに踊り廻つたので彼は紡車をひつくり返して食事の品々を運び去らうとして居た女中に突き當つて、あらゆるふざけをやつたので他の人達は彼を見て笑つて／＼死ぬ程笑つた。

突然室は全く静かになつた、そしてアーノルトが驚いて村長を振り向いた時村長はヴァイオリンの弓で窓の外を指さした、それから楽器を木のケースに元通りにおさめた。そしてアーノルトは戸外の街に一つの棺が運ばれて行くのを認めたのであつた。

六人の男が白いシャツを着て棺を肩の上のせて運んで居た、そして彼等の後ろには只一人で老人が歩み、金髪の可愛らしい少女を手に取つて進んで來た。

その老人は悲しみに心を打ち碎かれた人のやうに町を歩いて居たが少女は、四つ位の年だつたし多分その黒い棺の中に何が横たはつて居るのかの考へもなかつただらうから、彼女の知つて居る顔を見る毎に頭を樂しさうにうなづかせて居た。そして二、三匹の犬が走り過ぎてその一匹が村長の家の石段を上つて何度もゴロ／＼吠えた時、金切聲で笑つたのであつた。

併し沈黙は棺が見えて居る間だけ続いた、そしてゲルトルートは青年の方へ近づいて云つた。

「さあ、暫らく御休みなさい。貴方は随分跳ね廻つていらつしやいました。御休みにならぬと強い御酒が益々頭にしみこみますわ。いらつしやい、帽子を取つて一緒に散歩に参りませう。歸る時迄に居酒屋へ行く時間になりますわ、今晚舞踏會があるのです。」

「ダンスだつて、そりや素敵だ。」

とアーノルトは喜んで叫んだ。

「僕は丁度好い時に來たなあ、僕と最初に踊つて下さる事をお願いしますよ、ゲルトルート」

「いゝわ、御望みなら」

アーノルトは已に帽子とスケッチ帳を握つて居た。

「貴方はその帳面をどうするんですか」

と村長が訊ねた。

「お父さん、此の方は寫生なさるの、そしてもう私の繪を描いて下さいましたわ。ちよつとその畫を見て頂戴」

とゲルトルートは云つた。

アーノルトはスケッチ、ブックを開いて彼女の父の方へ畫を出した。

農夫は暫らくの間黙つて靜かにそれを眺めて居た。

「で貴方はそれを御持ち歸りになりますか、そして多分額縁に入れて壁にかけなさるのでせうな」と、とう／＼彼は訊ねた。

「どうしていけないのですか。」

「お父さん、さうしても宜いの。」

とゲルトルートは訊ねた。

「もし此の方が我々の所に留まるとしたら、わしは反對せん——併し背景に何か欠けて居るものがあるわさ」

と村長は笑つて云つた。

「何ですか。」

「今しがた通り過ぎたお葬式の行列です。紙にそれをお描きなさい、そしてたらその繪を持つて行くつてよろしです。」

「え？ 葬列をゲルトルートと一緒に！」

「充分書く餘地はあります。」

と頑固に村長は云つた。

「貴方はスケッチにそれを書き込まねばなりません。でなけりや、わしは貴方がわしの娘の肖像畫一枚でも持つて歸る事を許しません。こんな嚴肅な集ひでは誰も恐らくそれを悪いとは考へる事は出来ません。」

美しい少女に儀仗兵として葬列を加へよと云ふ奇妙な申し出に對しアーノルトは笑ひながら首を横に振つた。併しその老人は決心してしまつたやうに見えたので彼は機嫌を取る爲望む通りにした。後になつて彼は容易にその陰鬱な餘分の繪を消す事が出来ると思つた。

熟練た手で彼はつい今しがた通り過ぎた人物を記憶からではあつたが紙の上に描いた、そして一家の人は皆彼が描いて居る時、周圍に集まつて非常に驚きながら畫のすばやく仕上るのを見て居た。

「さあ、うまく書けましたかね」

とアーノルトは叫んで椅子から飛び上つて腕を伸ばして畫を差し出した。

「素晴らしくかけた」

と村長はうなづいた。

「わしはあんたがこんなに速く仕上げるとは思はなんだ。さあ、それでよい。娘と一緒に往つて村を見物して來なさい。貴方が再び此の村を見る機會のあるのは長い／＼後の事であらう。丁度五

時迄に御歸り——わし等は今晚ドンチャン騒ぎをやるので貴方に出て貰はねばならんから。」

その徴びた室と彼の頭に上つた酒の爲、アーノルトは重苦しく、壓迫されたやうに感じ始めて居た。彼は戸外へ出ようと望んで居た、そして二、三分後彼は美しいゲルトルートを傍に連れて村を通つて居る町筋を歩いて居た。

彼等が歩いて行つた時、前にあつたやうな沈黙は何處にもなかつた。子供達はあちらこちら道の上で遊んで居た、老人共は二人を眺めながらドアの所に座つて居た。そして奇妙な古風の家のある到る處は、もし太陽が屋根の上に雲のやうにかかつて居る濃い褐色の煙をさし通す事さへ出来たら、全く氣持のよい様子を現はしたであらうと思はれた。

「此の邊で野原か森が火事なんですか」

と彼は少女に訊ねた。

「こんな種類の煙は他の村ではないし、煙突から來る筈はないのだが」

「それは地上の蒸氣です、でも貴方はゲルメルスハウゼンの事をお聞きにならなかつたのですのとゲルトルートは靜かに云つた。

「いや、聞きませんね」

「それは變ですね、そしておまけに村は古いの、とても古いの」

「とに角家は古く見える。村の人は又こんな奇妙な生活をして居るし、言葉は近くの村のとは全く異つて聞えますよ。貴女は滅多に村の外へ出ないと僕は思ひますが」

「殆んど出ないわ」

とゲルトルートはぶつきらぼうに云つた。

「そして燕二匹すら残つて居ない。未だ確かに飛び去つてしまふ譯がないでせうね」

「まあ、すつと前よ。ゲルメルスハンゼンでは燕は決して巢を作りませんわ。多分地蒸氣に堪へられないのでせう。」

とゲルトルートは冷淡に答へた。

「併し本當に何時でも蒸氣はないのでせうね。」

「いゝえ、いつでもありますわ。」

「そしたらそれが果樹の實らないわけですね。それにマリスフェルトでは此年はとても實のなる年だつたので村の人は枝をつゝかひ棒で支へねばならなかつたのですよ。」

ゲルトルートは一言も答へず村を眞直ぐに通つて彼の傍に黙つたまゝ歩いた、そしてとう／＼一番端にやつて来た。途中彼女はあちらこちらで子供に親切さうにうなづいたり若い少女の一人二人に低い言葉で話した——多分晩のダンスの事とどんな衣裳を着るかについて話して居たのであらう。

そして二人が話して居た時その少女達はその青年畫家に好意あるまなざしを注いだ、それで彼の心は温められ且つ悲しまされた——彼は何故か全く分らなかつたが——そしてそれにも拘はらず彼はその爲にゲルトルートに敢へて訊ねようとしなかつた。

彼等は今や終ひに最後の家へやつて来た。たとへ村自体が活き／＼して居たとしても、此處ではとに角あらゆるものが静寂で死の様だつた。庭は何年も歩いた人のないやうに見えた。草は小道に

伸び放題で特に此の若い風來男によく分つた事はどの果樹も只一つの實をも持つて居ないと云ふ事であつた。

此の場所で彼等は二、三人の人が村の外から家へ歸つて行くのに出合つたがアーノルトは直ぐに彼等が葬列參會者の歸途である事を知つた。彼等は二人の顔を音もなくも通りに村の方へ入つて居た、そして殆んど無意識の中に二人は墓地へ足を向けたのであつた。

アーノルトは今、非常に眞面目な顔をしてゐるゲルトルートに自分が今迄に行つた場所や村の外の世界がどんなであるかを話して元氣づけようとした。彼女は汽車を見た事がなかつたし又その事を聞いた事もなかつた、そして彼の説明に對し注意して耳を傾け驚いたのであつた。

又彼女は電信の如きものゝ知識もなかつた、そして彼女はそれと同様にすべての他の現代の發明をも知らなかつた。それで青年畫家はドイツの國にこんなに孤獨にこんなに完全に世界から切りはなされて居て少しの接觸もない人間がどうして有り得やうか全く分らない程だつた。

かく話しながら二人は墓地についた、そして、此處でその若い他郷人は直ちに墓石や石碑の古い時代の姿に心を惹かれた、大体に於て簡單で單調ではあつたが。

「此處に古い古い石がありますよ」

と彼は一番近くにある石にかがんでその上に刻んである碑文を難かしさうに判讀し乍ら云つた。

「アンナ・マリア・ベルトールト、舊姓シティーグリッツ、一一八八年十二月十六日生、一二二四年十二月二日死」

「それが私の母です」

とゲルトルートは嚴そかに云つた、そして大きな水晶のやうな涙が彼女の眼に溢れて、彼女の胴衣にぼたり／＼と落ちた。

「貴女のお母さんですつて？ ゲルトルート」

と驚いてアルノルトは云つた。

「それは多分高祖母でせう」

「いゝえ、あたしの母さんです。父は再婚致しました、家に居るのは私の繼母です」

とゲルトルートは云つた。

「併し確かに二二四年と書いてありますよ」

「でもどうして年が氣にかかりますの」

とゲルトルートは悲しさに云つた。

「此のやうに人が母から別れるのは本當に悲しいんですわ、そしておまけに——」

と彼女は悲しげに小聲でつけ加へた。

「多分、豫め神の御許に行く事を許されたと云ふ事は本當に宜い事でしたわ」

アルノルトは頭を左右に振り乍ら石の上にかがんだ、そして日附の最初の「二」が「八」ではなからうかと碑文を綿密に調べた。と云ふのは古へではこんな事を書くのは不可能ではなかつたのだから。併し第二番目の「二」は確かに第一番目のものと同じであつた、そしてしかもそれは一八八四年と讀むには餘りに早すぎるのであつた。多分間違ひをしたのは石工であつたのであらう、そしてその少女は此の世を去つた人の憶ひ出が餘りに深かつたので彼は彼女の氣に入らぬ問ひをして之

以上彼女を惱ましたくはなかつた。

それで彼は彼女を墓石の傍に残した、そしてその前に彼女は深く跪ぎて黙つたまゝ祈禱して居た。彼は他の石碑を調べ続けたがそのすべては例外なく數百年前の九百三十年や九百年頃の昔迄にすら溯つた日附を持つて居た。最近の墓石は最早なかつた、そしてしかも最近の新しい墓石が示す様に死人は今ですら此の場所に眠るやうに埋められてあつた。

低い教會境内の外壁から古い村の見晴らしがすばらしかつた。アルノルトは素早くその機會を利用して寫生しようとした。併し此の場所にも亦奇妙な霧が垂れて居た、尤も森の方に彼は太陽の光線が山の傾斜に輝やかしく清く注いで居るのを見たけれども。

その時村から古いひびの入つた鐘が再び響いて來た。ゲルトルートは素早く立ち上り涙を拭うて靜かに自分に従いて來るやうに青年の方へ手招きした。

アルノルトは急いで彼女の脇に立つた。

「さあ、もう私達は悲しまなくてもいゝわ」

と彼女は微笑を湛へて云つた。

「教會の鐘が鳴つておつとめの濟んだのを知らせてますわ、そして此れからダンスですわ。今迄貴方はきつとゲルメルスハウゼンの村人は人の氣持を陰氣にする人々に過ぎないと想像なすつていらつしやつたでせう。併し今晚は全然反對である事が御分りになりますわ。」

「しかし向ふには教會のドアがありますね、そして誰も出て來ませんが」とアルノルトは云つた。

「それは全く當り前の事ですわ、それはね、教會には誰も決してゆかないのですわ、牧師さんでさへ。只役僧が休みや楽しみ事を知らないで教會の内や外で奉仕の鐘を鳴らして居るのです」

「村の人は誰も教會へ行かないのですか」

「え、彌撒にも懺悔にも行きません」

と少女は靜かに云つた。

「私達は外國に住んで居る法王と喧嘩して、私共が服従して歸順する迄それを禁じられたのです」

「しかし僕は今迄こんな事を聞いた事ありませんね。」

「え、それはずつと昔の事ですわ。」

と少女は平氣で云つた。

「御覽！ 役僧が只一人で教會から出て来て戸を閉めて居ますわ。あの人は晩も決して居酒屋へ行かないで家で一人で靜かに座つて居るのです」

「そんなら牧師は居酒屋へ行きますか」

「え、さう思ひますわ、牧師さんはあの人々の中で一番楽しいのです。彼はくよくよしません」

「一体どうして、こんな事になつたのですか」

とアーノルトは聞いた、彼はその事柄よりもむしろ少女の純真さに驚いて云つた。

「それは長い話ですの、そして牧師さんはそれを大きな部厚い本に書きましたわ。もし貴方が面白く思はれましたら、又ラテン語がお分りでしたら、其處で御讀みなさい。」

とゲルトルートは云つた。

「やあ」

と彼女は警告の爲につけ加へて云つた。

「父がそばに居る時そんな話をなさらないで下さい、と云ふのはお父さんはそれを好まないのです。御覽！ 子供達ももうドアから出て來ますわ。私、急いで家へ歸つて着物を着なくちやならないわ。私は一番遅れたくないんですもの」

「そして最初のダンスをね。ゲルトルート」

「え、貴方と一番始めに、貴方は私に約束なさいましたから」

二人は村の方へ早く引き返した。村は今や朝とは全く異つた生活が營まれて居た。笑つて居る青年の群がどの道端にも立つて居た。少女達はお祭りの爲皆んな着飾つて居た。そして若い男も亦一張羅の服を着て居た、一方居酒屋の表では二人が急いで通り過ぎたとき、木の葉の花綵が窓から窓へと、かけられてドアの上に廣い凱旋門を形作つて居た。

すべての人が非常に燦爛として飾り立てゝゐるのを見て、アーノルトは自分の旅行服でお祭り騒ぎの群に交らうとしなかつた。それで彼は村長の家でリュック・サックを開けて瀟洒な衣服を取り出して丁度化粧を終へた時ゲルトルートがドアを叩いて彼を呼んだ。

そして質素ではあるが美しい衣裳を着た少女達は何と美しい繪と見えた事だらう、そして彼女の



父がすつと後程迄来ないだらうと云つて彼女が如何にしとやかに自分を護るやうに彼に乞ふた事であらう。

彼女のハイソリツヒに對する憧れは決して彼女の氣をふさがす筈がないと云ふのが、彼女の腕を自分の腕に組み次第につのる薄暗の中をダンスホールへと過ぎ去つた時その青年に浮んだ最上の考へであつた。併し彼はこんな考へを口にする事を慎んだ、と云ふのはある不可思議な感情が彼の胸にぞつとしみ渡つたから。そして彼自身の心臓は自分の腕に少女の心臓の高鳴るのを感じた時劇しく鼓動を打つたのであつた。

「明日出發せねばならぬと云ふ事を考へると」

と彼は靜かに溜息した。彼はさう欲して居なかつたのだが彼の言葉は彼の踊り相手の耳に聞えた、彼女は微笑んで云つた。

「そんな事心配しなくてもいいのよ、私達は長い間一緒に居ませう——多分貴方が御望みになるよりもつと長いこと」

「そして貴女はうれしい？ ゲルトルート、もし僕が貴女と一緒に留るなら」

とアーノルトは訊ねた、そして話し乍ら彼は血が額と頸顚（ごうけん）の上で滿ち／＼た波動となつて湧き立つて居るのを感じた。

「勿論嬉しいわ」

と若い女は簡單に云つた。

「貴方は好い方で親切だわ、そしてお父さんも亦貴方が好きよ、それ確かだわ。——ハイソリツヒは来ないことよ、ねえ。」

と彼女は低い調子で幾らか怒つて云ひ加へた。

「明日來ると思ひますか」

「明日？」

とゲルトルートは大きな黒い瞳の底から眞面目に彼を見つめて云つた。

「今と明日との間には長い、長い夜がありますわ。明日！ 貴方は明日その言葉がどんな意味がお分りになりますわ。でも今日はそんな話止ませうね」

と彼女は突然だが愉快に云つた。

「今日はお祭りです、それに對して私達はどんなに長く待つてた事でせう、あゝ、どんなに長く！そして陰鬱な考へでお祭りを汚さぬやうにしませう。」

「さあ、來ました。少年達は私が新しい踊り手を連れて來たのを見る時、随分眼を見張る事ですわ」

アーノルトは彼女に何か答へようとして居たが彼の言葉はダンス・ホールの中から巻き起つた騒がしい音楽でかき消されてしまつた。樂士達は又聞き慣れぬ音楽を奏じて居たが彼はどの一人をも

はつきり見えなかつた、そして始めは彼は眼の前で輝いて居る澤山の明りのきらめきによつて殆んど目が眩んだ位であつた。

ゲルトルートは彼をホールの中央に連れ、そこでは一群の若い農夫の娘と一緒に話し乍ら立つて居た、そして彼女はダンスの本筋が始まつて彼がまはりを一寸見まはし他の若者と知り合ふやうになる迄、彼を離さないで居た。

### III

最初の瞬間此の多くの見知らぬ人の中に交つてアーノルトは愉快に感じなかつた。更に彼等の奇妙な衣裳や話ぶりが彼を氣持悪くさせた。荒々しい聞き慣れぬアクセントがゲルトルートの唇からは優しく響いて來たけれども、他の人によつて發せられた時は彼の耳許で軋るやうだつた。若者達は彼に對し皆友情のある氣持を持つて居た。そして彼等の中の一人の男が彼に近よつて來て、彼の手を取つて云つた。

「貴方が我々と一緒に留まらうとなされたのは賢明でしたよ。僕等は愉快的な生活を送るのですよ、そしてその期間は全く素早く過ぎ去るんですよ。」

「期間とは何ですか」

とアーノルトはその顔付よりも寧ろその若者が此の村を自分の故郷にしようとしつかりと信念を述べたのに驚かされて云つた。

「私が此處へ歸つて來ると云はれるのですか」

「併し貴方は去らうとお望みですか」

とその若い農夫は鋭い口調で云つた。

「明日です、ええ、又は明後日に。併し私は又戻ります」

「お、明日だつて！」

とその若者は笑つた。

「ぢやそれでいゝよ、なる程。僕達、明日その事についてもつとお話ししよう。さあ、いらつしやい。僕達がどんなに楽しむかを見せて上げませう。と云ふのもし本當に明日歸らうと思ふのならば、貴方は結局お祭りを見る機會を得る事が出來ないでせう。」

他の連中はお互に顔見合せてうなづきつゝ笑つた。一方その若い農夫はアーノルトの手を取つて家中を案内したが家は今お祭り騒ぎの人々で一杯だつた。始めに彼等の通つた室では澤山金を積んでトランプをやる人が腰かけて居た。次に彼等はきら／＼する敷石のつめてある球場へ來た。

第三番目の室では輪投やその他の遊戯が行はれて居た。そして若い少女が内や外で笑ひ、歌ひ乍らそして若者をからかひ乍ら跳ね廻つて居た。とう／＼今迄暢氣に遊び續けて居た樂隊からの前奏が突然にダンスが始まる合圖を與へた、ゲルトルートはアーノルトの側に立つて彼の腕を取つた。

「さあ、一番遅れてはいやよ、村長の娘として廣間の戸を開くのは私ですもの」と美しい少女は云つた。

「だがあれは何と奇妙な節だらう」

とアーノルトは云つた。

「僕はあの拍子に合せられないよ」

「まあ、すぐに五分で拍子が取れますわ。貴方にその方法を教へて上げませう」

華やかな叫聲ですべての會合者はトランプ遊びを除いてダンス・ホールにおしよせた、そしてアーノルトはその腕に驚く程美しい處女を抱いて幸福を感じた最初の瞬間何事も忘れてしまつた。

繰り返し繰り返して彼はゲルトルートと踊つた。誰も彼れも彼からその踊り手を求めようとすやうには見えなかつた。尤も他の少女はしば／＼二人が飛ぶやうに踊つて側を通り過ぎる際からかふやうな言葉を投げたけれども。

併し唯一つ彼の心を驚かした事があつた。居酒屋の近くには古い時代の教會が立つて居てひび入つた鐘の鋭い不調和な響きがはつきりホールの中で聞えたのであつた。鐘が初めて鳴つた時は恰かも魔術師の杖が踊り手を擲つたかの如くであつた。

音楽は鐘の鳴り響く途中で止んだ、樂しげな波打つ如き群は靜かに止まつて動かずに立ちすくんだ、總べての人が黙つて一つ一つゆっくりした鐘の響きを數へた。

だが最後の響きが消え去るや活氣と暢氣が再び新しく起つた。こんな事が八時、九時、十時に繰り返された、そしてアーノルトがこんな奇妙な事を何故するのか私かに聞いた時には、ゲルトルートは自分の唇に指を當て、同時に非常に嚴肅な悲しさうな様子をしたのでどんな事があつても彼は

之れ以上彼女を惱ます事が出来なかつた。

十時に舞踏は止んだ、樂士達は強精劑を飲まねばならないので若者は列をつくつて下の食堂へ行つた。

そこには樂しい事があつた。酒は恰かも流れる如く飲みつくされた。アーノルトは他の連中に伍して後れを取らずに飲んだものだから、此の金のかかる晩が彼の餘り裕福でないポケットにどんな穴を空けるか心の中で勘定した。

併しゲルトルートは彼の傍らに座つて一緒に同じグラスで飲んで居た。どうして彼はこんな金のかかると云ふ懼れに屈するものだらうか。

十一時の最初の響きが鳴り渡つた。再び酒盛騒ぎの人々の聲高い歡樂がひっそりとした。又長く引く響きに同じく息を凝らして耳を傾けた。

ある奇怪な恐怖の念が彼を襲ふた。併しその譯が分らなかつた、そして故郷の彼の母の事が心に沁み渡つた。彼はゆつくりとコップを上げて留守の大事なひとの爲に乾杯した。

十一時が打ち終ると會の人々はテーブルから飛び立つた、舞踏は再び始まつた、そして彼等すべては早足でホールへ急いだ。

「最後の乾杯は誰の爲なの」  
とゲルトルートは彼の腕を再び抱いて訊ねた。

アーノルトは答へるのをためらつた。多分彼女に云つたら只笑ふに過ぎないだらう。しかしさうではない。彼女自身もその日の午後と云ふ午後彼女の母の墓で熱心に祈つて居たのであつた——そ

れで彼は低い聲で云つた。

「僕のお母さんに」

ゲルトルトは一言も云はないで彼の傍に沿つて二階へ上つて行つた。彼女も亦笑ふのを止めて居た。そしてダンスを再びやる爲に場所を取つた時彼女は彼に聞いた。

「貴女はお母さんがそんなに大好きなの」

「僕のいのち以上にだよ」

「お母さんも貴方を愛していらつしやる？」

「母がその子を可愛がらぬ事があるものですか？」

「もし貴方が決して家のお母さんの所に歸らなかつたとしたらどう？」

「可愛想なお母さんだな、心も碎けるだらう」

とアーノルトは云つた。

「舞踏が再び始まる所だわ。さあ、いらつしやい、私達は一刻も逃してはなりませんわ」

それで以前よりも更に劇しくダンスが始まつた。若者は強い酒にあふられて叫び、歡聲を擧げ金切聲を立てた、そして音楽に溺れたかのやうな騒ぎが起つた。

アーノルトは此の喧騒の中にあつてそんなに幸福に感じられなかつた、そしてゲルトルトも亦眞面目に黙りこくつてゐた。併しそんな事にはお構ひなしに騒ぎは只増すのみだつた。ダンスの休憩の間村長がやつて来てその若者の肩を軽く叩いて笑つて云つた。

「結構々々、繪描きさん、今晚は思ふ存分にやりなさい。我々は時間が澤山あつて可なり長い休

みが取れませう。いや、所でゲルティ、どうしてそんな眞面目な顔をしとるのかい。そりやあ、今晚のダンス向きの顔ぢやないぞ。さあ、暢氣になあ——お、ダンスが始まるぞ。

さて俺は老婦人を訪ねてやらねばならん、そして最後のダンスをするのぢや。用意して。樂士は仲々頬をふくらまして吹いて居るぞ」そして歡聲をあげて彼はお祭り騒ぎの人の群に飛び込んだ。

アーノルトはもう一度ゲルトルトを抱いてダンスを始めた。その時ゲルトルトは突然彼から離れて彼の腕をつかんでやさしく囁いた。

「Sag mir was。」

アーノルトは何處へ行くのか彼女に訊ねる餘裕がなかつた、と云ふのは彼女は彼の抱いて居る腕から滑べるやうに脱れてドアの方へ走り寄つたのだから。

「何處へ行くの、ゲルティ」

と彼女の遊び友達之二、三人が二人に呼びかけた。

「直ぐ歸るの」

と云ふ彼女のぶつきら棒の返事が聞えた。そして數秒後彼女はアーノルトと一緒に戸外の家の前の、すが／＼と夜の空氣の中に立つて居た。

「何處へ行かうと云ふの、ゲルトルト」

「お出だ」

再び彼女は彼の腕をつかんで村を通つて彼を連れた。父の家を過ぎると彼女は家へ飛び込んでやがて小さな束を持つて出て來た。

「此れは何の事から」

とアーノルトは驚いて訊いた。

「お出で」と云ふのが彼女の返事した只一つの言葉だった。家々を通り過ぎて彼女は一緒に大股で歩いた、そしてとう／＼二人は村の一番涯の城壁を後にしてしまつた。ずつと此處迄彼等は幅の廣いしつかりとした固く敷き詰められた國道に沿うて居た。今ゲルトルートは左に道を曲り小さな低い丘に登つた、その頂上から居酒屋のきら／＼と明りのついた窓と戸が見えた。

こゝで彼女は立ち止まつた、アーノルトに手を差し延べて優さしく云つた。

「貴方のお母さんに宜しく、御機嫌よう」

「ゲルトルート」

とアーノルトは驚き果然として叫んだ。

「貴女は眞夜中こんなにして僕を送り歸す積りですか。何か僕の言葉で貴女の氣に障つた事でもありましたか」

「はいえ、アーノルト」

と少女は始めて彼の名を呼んで云つた。

「貴方を愛して居ればこそ、貴方は御歸りにならねばなりません。」

「しかし、私は貴女をこんなにして獨りぼつちで眞暗闇の中を村へ歸す事は出来ません。ゲルテイー。貴女は僕が貴女をどんなに愛して居るか知らないのです。貴女は完全に二、三時間の中に私

の心を奪つたのです。貴女はそれを知らない……………」

「もう何にも云はなすで下さす」

と彼女は急いで彼の言葉を遮へ切つた。

「私共は別れません。十二時を打つた時——もう十分許りですわ——宿の戸口へ歸つて下さい。そこで私は貴方を待つて居ますわ。」

「そしてそれ迄……………」

「此處で留まつて居て下さい。時計が十二時を鳴り終る迄右へも左へも一步も動かぬ事を約束して下さい」

「約束します、ゲルトルート、しかしそれから……………」

「それから、お出でなさす」

と彼女は云つてお別れに手を差しのべ去らうとした。

「ゲルトルート」

とアーノルトは歎願するやうな、そしてやつれた聲で云つた。

ゲルトルートはためらつて居るかのやうに一瞬立ちどまつた。それから突然彼の方を向いて腕を彼の頸の周りに廻いた、そしてアーノルトは彼の唇にあてられた美しい處女の冷めたい唇を感じた。しかしそれは僅かの一瞬間の事であつた。次の瞬間彼女は無理に引き離して村の方へ飛ぶやうに駆け下りた。そしてアーノルトは彼女の奇怪な振舞に驚き、しかも約束に心惹かれ彼女が残

した場所に立ち續けた。

さて彼は始めて此の二、三時間の中に、どんなに天候が變つて居たかに氣づいた。風は樹間を咆つて吹いて居た、空は重たさうな走りゆく雲が低く垂れて居た、そして一つ二つ大滴の雨が落ちて暴風雨の迫るのを示して居た。

夜の暗黒を通して光りが居酒屋から輝やかしくきらめいた、風が咆つて吹いて來た時彼は音の切れ／＼の波の中に樂器の騒々しい音を聞く事が出來た——が長い間ではなかつた。彼が二、三分程その場所に立つて居ると古い教會の時計が鳴り始めた。その瞬間音楽は止んだか或ひは咆哮する嵐にかき消されたやうであつた。そして暴風雨は丘の傾斜の上を非常に劇しく吹き荒れたのでアーノルトは地面にかがんで体の平衡を失はぬやうにせねばならなかつた。

彼の前の地面の上で彼はゲルトルートが家から持つて來た束にふれた——そして恐しくなつて彼は眞直に立ち上つた。時計は鳴り終つて居た。暴風は頭上を咆つて行つたが村の何處にも最早明りは見えなかつた。暫らく前吠え居た犬も黙つてしまつて、濃いじめ／＼とした霧が凹地から上つて來た。

「時間が來た」

とアーノルトは呟やいた、そしてリュック・サックをかついだ。

「僕はもう一度ゲルトルートに會はねばならん。此んなにしてどうして別れられやうか。ダンス

は終つたのだ。踊り手は家へ歸へつて行く所だらう、もし村長が泊めてくれないなら宿屋に泊らう。その上眞暗で森の中で道が分らないだらうな。」

彼は注意深く彼とゲルトルートが一緒に上つたゆるやかな傾斜地を降りて村へ行く幅の廣い道にしようとした。併し彼は空しく下方の叢の中に手さぐりして居るばかりだつた。

地面は柔かく、じめじめして居て彼の浅い靴は踵の所まで沈んだ。到る處に赤楊の茂みが生ひしげつて居て、丁度そこが彼は道だと思つて居たのであつた。彼は恐らく暗い處ではそれを横切る事は出來なかつたらう。彼は其處へ差しかかつた瞬間きつとさう感じただらう。その上彼は村のまはりの壘壁が眞直にそれを横切つて居ると思つた——此の事はとにかく見逃がさなかつた。

しかし悶えたせき立てた心でそれを探したが駄目だつた。地面は益々柔らかくなり、進めば進む程じめ／＼して來た、下生はより繁くなり到る處、棘で惱まされた。それは彼の服を裂き手をひつきき血が出たのであつた。

彼は右へ左へ村を越えて放浪らつて居たのであらうか。彼は完全に方角を失ふのではないかと心配した。そして可なり乾いた地點で立ち止まりそこで一時を打つ迄待たうと決心した。

併し時計は一時を打たなかつた、犬一匹吠えなかつた。人の聲も彼に聞えなかつた、そして難澁を重ねてびつしより濡れて、寒氣に慄へて彼は再び悩みながら高い方の丘の傾斜地に戻らうとした、其處はゲルトルートと別れた所なのだ。

此の地點から彼はもう二、三度努力して藪をつき抜けて村を探さうとしたが駄目だつた。死ぬ程

疲れ切つて、奇妙な恐怖の念に捉はれつゝ、彼はとう／＼低い暗い氣味の悪い洞穴に避難した、そして木蔭を求め夜を明かさうとした。

そして彼にとつて時間の過ぎ去る事の何とゆつくりして居た事だらう。と云ふのは彼は寒さでふるへて居たが彼は一瞬間の眠りでもさへもその長い夜の間得る事が出来なかつたから。彼は絶えず耳を暗黒の中で緊張させて居た。何度も彼は鐘の軋るやうな音を聞いたと思つたが、只間違つて居るのに氣がつくだけだつた。

とう／＼曙の光りが始めてきらめいて遙か東の空が白みそめた。雲は散つてしまつて居た、空は再び清くなり星が輝やいて居た、そして目を覺ました鳥が朗らかに暗い木枝の中で囀つて居た。

こがね色の地平線は段々明るくなつて、已に彼は周圍の木のでつぺんをはつきりと見る事が出来た。併し古い褐色の教會の塔と風雨に曝されたあの屋根を見つけ出さうとしたが無駄だつた。あちらこちらに点在せるものとして赤楊の茂みに過ぎず、枝のいぢけた數本の柳の木が彼の前に枝を張つて居た。左へも右へも道は續いて居なかつたし又近くに人間の住んで居る跡もなかつた。

日は次第に明るくなつて來た。最初の太陽の光線が彼の眼前に擴がつて居る幅の廣い緑の大地に投げかけた。アーノルトは途方にくれて此の謎を解かうと後方の谷の方へかなりさまよふた。彼は場所を探して遠くへ行過ぎた間に知らず知らず暗黒の中で道を失つたのに違ひないと思つた。彼は今やもう一度それを發見しようと思つて決心した。

とう／＼彼はそこでゲルトルトの繪を描いた石の傍へ來た。此の場所を彼は何度も認めて居た

であらう。と云ふのは固い枝を持つて居るリラの木がそれを餘りにも明らかに示して居たから。

彼は今やどの方角からやつて來て何處にゲルメルスハウゼン村があるかをはつきりと知つた。それで彼は谷に沿うて早く引き返し、彼とゲルトルトが昨日來た同じ道を取つた。向ふの方では又彼は傾斜の中に屈曲地を認めたがその上方には暗い霧がかゝつて居た、そして赤楊木が彼と一番近くの家との間にあるだけであつた。

彼は今其處へついて居た。彼はおし進んだ、そして——もう一度彼が前の晩わたつて居たあの同じじめ／＼した沼地に居る事が分つた。

全く途方にくれて自分の意識をも失つて、彼は此の地で道をおし分けて行かうとしたが終に汚ないじめ／＼した泥の爲彼は再び乾いた所へ行かざるを得なかつた、そして其處へ彼は前進後退空しくさまよふのであつた。

その村は永久に消え去つてしまつた。

七時間は多分此の無駄な搜索に費されて居ただらう、彼の疲れ切つた手足はとう／＼之れ以上動かうとしなかつた。彼は最早歩けなかつた。何はさて置き彼は休まねばならない。此の空しい搜索が何になつたのか。彼がぶつかつた最初の村で彼は容易にゲルメルスハウゼン村へ案内してもらへた。それから彼は再び道を間違ふやうな事はなかつた。

へと／＼に疲れ果て、彼は木の下に身を投げ出した——そして彼の最も良い服が何とひどく破れてた事だらう。けれどもこんな事で彼はく／＼しなかつた。彼はスケッチブックを取り出し、ゲルトルトの肖像畫を取つた。痛々しい苦しみと共に彼の眼は愛らしい少女の顔に注がれたが、

もう彼の心をしつかりとつかんで居たのであつた。

それから彼は後ろに木の茂みの中でざわ／＼するのが聞えた——犬が吠えようとして居た。そして急に立ち上つて彼は一人の年とつた木こりに気がついたが、彼から遠からぬ所に立つて、上品な服を着て居るがこんなにも亂れた様子をして居る奇妙な人間を不思議さうに眺めて居た。

「今日は」

とアーノルトは人に遇つたのを心から喜んで叫んだ、そして急いで繪を紙挟みの中におし入れた。

「貴方は丁度僕に招かれたやうにいゝ時に來て下さつた。山番さん、實は僕は道を失つたのです」

「ふむ」

とその老人は云つた。

「もしあなたが一晚中此の茂みの中で寝て居たのなら、わしもさう思ひますぢや、で向ふのディルシュテット迄半時間ぢや、そこにはいゝ宿もある。へえ！ あなたは何んと云ふ姿ぢや、どう見ても棘と泥を一度にかぶつたやうだわい！」

「貴方は此の森を良く御存じですか」

とアーノルトは訊ねた、彼は何よりも自分が本當に何處に居るのか知りたかつた。

「よく知つとる」

と木こりはマツチを擦つてパイプに火をつけ乍ら笑つて云つた。

「一番近い村は何と云ふのですか」

「ディルシュテット——眞直ぐ向ふの所ぢや。向ふの小さい丘にさしかかつたら眼下に横はつて居

るのがすぐ分る」

「で、ゲルメルスハウゼン迄どの位ですか」

「何處へだつて？」

「ゲルメルスハウゼン村へ」

「こりや何と——」

とその老人は彼のまはりにさぐるやうなまなざしを注いだ。

「森なら良う知つて居ますわい、だが地下のどれ程深い所にあの『呪はれた村』があるか神様だけが御存知ぢや——いやそんな事はわし等に關係はない事ぢや」

『呪はれた村』ですつて」

と驚いてアーノルトは叫んだ。

「ゲルメルスハウゼン村は——さうぢや」

と木こりは云つた。

「丁度あそこの沼地の中、今柳や赤楊の老樹が生えて居る所は何千年と云ふ昔その村があつたと云ふ事ぢやが、その後沈んでしまつて、誰も何う云ふ譯で何處へか知らんのぢや。話によれば百年毎にある日その村が再び浮び上つて來て甦ると云ふがわしはクリスチャンが偶然にそこに居合はせるといふ事は考へたくないわい。

だが、一体全体、昨晚茂みの中で寝たのが体に悪かつたやうに見える。あなたは幽霊のやうに青



白く見える。さ、ちよつと、此のウイスキーをなめなされ、良く利きますぞ——さあ、ぐつとやりなれよ。」

「有難う」

「ちゆつ、ちゆつ。半分ぢや駄目だ、もつと充分に上れ。それでいゝわい、それが當然の分量なんぞで。で急いで宿へ行つて暖かい床へもぐり込む事ぢや。」

「ディルシュテットですか」

「え？ 勿論だよ、それより近い所にはない。」

「ゲルメルスハウゼンは」

「その場所の事はもう云はぬやうになされ。特にわし等の居る此處ではな。死人は休ませる事ぢや、そして分けても休む事さへ楽しまないで無益に浮び上らうとして居る死人にはな。」

「併し昨日その村はちやんと此處にありましたか」

とアーノルトは自分の考へを抑へ切れないで叫んだ。

「僕はその村に居ました——飯を食つて、酒を飲んで、そして踊つたんです。」

木こりは靜かに青年を上から下へと眺めて微笑みながら云つた。

「しかし何か別の名ではないかのう。多分、貴方はディルシュテットから眞直ぐにやつて來たのぢや。昨晚あそこで舞踏會があつて、その時地主が作った酒には誰でも堪へられないのぢや。」

返事の爲にアーノルトは紙挟みを開いて、教會の構内で描いた畫を取り出した。

「此の村を御存知ですか」

「知らぬのう、此の地方にはこんな平たい塔はない。」

と木こりは頭を振つて云つた。

「これがゲルメルスハウゼン村です、で此の附近の百姓娘は此の少女のやうな衣裳を着て居ますか」

「うむ——ちがふ。所であなたが此の畫に描き入れたその奇妙な葬式の列はどうしたのかね。」

アーノルトは一言も答へなかつた。彼はその畫を元通り紙挟みに入れた、そしてある奇妙な苦惱の感情が彼の心にしみわたつた。

「お前さん、ディルシュテットへの道は間違ふ事はないよ」

と木こりは氣立良さうに云つた、と云ふのはもしかしたら此の風來坊の頭がどうかして居るのではないかと云ふ暗い疑ひが彼に起きたからであつた。

「併しお望みならその場所が見える所迄、わしが連れだつて行きませう。わしに取つて大して廻り道ぢやないからのう。」

アーノルトはお禮を云つて斷わつた。

「向ふの方では道は良く分るでせう。そして百年毎に只一度村が再び浮び上ると云ふのですね」

「皆んな、そう云ふとるがもし本當なら誰がそんな事を云ふもんか」

アーノルトは再びリユツ・サツクを取上げた。

「御機嫌よう」

と彼は木こりに手を差し延ばして云つた。

「やあ、有難う、で、何處へあんたは行かれるかの」

「ディルシュテットへ」

「よろしい——傾斜地を越えたら幅の広い本道に出ますぞ」

アーノルトは方向を變へた、そしてゆつくりと道を進んで行つた。谷の全景を見はるかす傾斜地の頂上に着いた時始めて、一度休んで振りむいた。

「さようなら、ゲルトルート」

と彼は靜かに呟やいた、そして丘を越えて行つた時、大きな水晶のやうな涙が眼からはら／＼と流れ落ちたのであつた。(終り)

註

(此の作の原名は「ゲルメルスハウゼン」である)

フリードリッヒ・ゲルシュテターカ(一八二六—一八七二)ハンブルグの大家オペラ歌手ノ息子。落着かない冒險的な生涯を送つた。子供の時から父の放浪癖を多分に受継ぎ、一八三七年父の死後、渡米し移住した。そこで鐵砲と獲物袋を携へて國內を到る處跋涉、放浪した。

郷愁の爲一八四三獨乙へ歸り、日記「漂浪と狩獵記」を出版したが大成功であつた。それから彼は文筆勞動に倦まざる努力を捧げたがそれも四度に及ぶ世界航海旅行に妨げられた。

ゲルシュテターカは澤山の冒險小説と寫生文を物したが彼の作品の最上のは短篇小説と隨筆に、特に此の「ゲルメルスハウゼン」にある。此れは一八六二年出版の「Heimlichen und unheimlichen」の一卷におちめられてある。

沈んだ村、町、城の傳説はドイツの俗傳に廣く知られて居て、W・ミュラー、ハイネ、ウーラント等によつて文學に取扱はれて居るがゲルシュテターカの手法は全く獨創的で詩的幻想と靈感とに欠けて居ない。

(十一・八・二十一日於飛驒)

野分がさつと吹きすさむ毎に窓外の桐の枯葉がかさ／＼音を立てて一葉々々冷めたい大地に落ちて行く。又一しきり強く野分が吹いて来ると地上の枯葉がばら／＼と窓の縁へ舞ひ上つて来る。恰かも天然色映畫を見るやうに美しく映えてゐた紅葉も段々色があせてやがて近づかうとする冬へ心構へしてゐる。月日の経つものの速いのに比べて我々の進歩の牛歩の如く遅々たるを徒に嘆くのみである。

幾多の理想、夢を抱きつゝ二學期を過して來た私は今此の現實、北辰會雜誌第三百三十六號の編輯を終へるに際して、私は惱みつゝ、苦しみつゝ、悶えつゝ後記の執筆に取りかゝらうとする。

四高學園に文化の慈光そゞぎ、學藝の花咲き亂れる日は何時であらうか。

高校生活三年間、何も發表しないで大學に行く——これは恐ろしい事だ。

創作であらうと詩歌であらうと、はた又論說であらうと、それ等が我々の若々しい野性と智性とを以て人間生活の現實にぶつかり新たな社會性を建設せんと企つ意欲の發現である以上は、それを示すに何の臆する所があらうか。

論說の過誤、他人の批評を氣にするやうな青年らしくない虚榮心は速やかに棄てねばならない。かゝる虚榮心こそ青年の純眞を傷け向上發展を阻止するものである。そして此の實行こそ青年の文化に對する情熱であり良心である。これによつて現代青年の非良心的逃避的實利主義的傾向が打破されねばならない。

我々は我々の心から眞理に對する愛が驅逐されてはならぬ。批判的精神と懷疑的精神が絶た

れてはならない。

人間精神をば考へ得べき最も狭い眼界に拘束し、人間をば迷信的思想の盲目的機械、傳統的慣習の奴隷たらしめ、人間からあらゆる偉大さを奪ひ去る(中世的な)思想に抗しなければならぬ。

青年の常識が日々々々失はれて行く現代である。あらゆる骨を抜き取られた高校生が毎年毎年大學へ投げ込まれて行く。

本號も亦自慢出來ぬものとなつた。投稿者が甚だ少い。部員の不振も遺憾であつた。没落的實利派から見れば雑誌に投稿するやうな者はお人好し位に見えるのだらう。我々の先輩がその昔「自由の爲に死するてふ、主義を愛して死するてふ、男の意氣地今も尙、岩に碎きて碎き得じ」と歌ひ、「藻の花開くうつし世に、潮の流れ渦をまく、名もなき道を行く勿れ、吾等が行先星光る」と叫んだ時代も何時しか今日に至つて、「時代の流轉夢のごと……あゝ超然も花枯れて、文化の影や今いづこ」と嘆ぜしめ、「自由も主義も君問はば歸らぬ夢と我答ふ、時代の思潮の逝くがごと……」と哀嘯之久しうせしむるに至つたのである。徒に悲鳴ばかりあげないで此處らで何か一奮發して欲しいものだ。本ばかり買つて何も書かんとはけしからん事だ。

創作欄は少數ながら家門君の「始祖鳥」、小島君の「純情」は佳作であつた。

犬丸教授の短歌は御多忙中御無理をして頂いたもので厚く御禮申上げる次第である。その他取立てて云ふ程のものはないが松林君の「主觀と客觀」は未熟で幼稚の域にあり今後の奮發に

期待する。森本君の俳句も今後の進歩に期待したい。

本號に於て一年部員やその他絶大の期待をかけてゐた人の作品を得る事の出来なかつたのは遺憾であり、前號に續いて又芳ばしからぬ内容の雑誌を出さねばならなかつた事について編輯者として私は何か責任めいたものを感じる。これが私の悩みであり、苦しみであり悶えであるのだ。そして私は何だか淋しい氣持になつてぼんやりとして喫ひさしの煙草の煙を凝視めてゐるばかりだ。

文藝部では九月十日「悪靈」、同三十日映畫「マヅルカ」、「兄いもうと」、十月七日「復讐」の批評會を催し、同十九日「ボウ」研究會を行つた。得る所少しとはしなかつた。それ以後全く沈黙してしまつたのは残念だつた。

映畫研究會は古小路、館兩君の努力により優秀映畫の觀賞券が發行され、全校可成りの便宜を感じてゐる模様で、今後益々盛にして行きたいと思ふ。

明春五十周年記念を控へて學校當局並びに六百有餘の四高生諸君に如何なる覺悟と準備があるのだらうか。我々は此の五十周年記念の意味及び精神をよく理解しなければならぬ。

最後に當り原稿檢閲の勞を取られた密田、大丸、大河、木場の諸先生に厚く御禮申し上げ。

(二十五日、新煙草「光」を味はひつゝ、佐口)

### 文 藝 部

部長 密田 教授  
委員 文乙 三家門夫治雄  
文甲二ノ二 古小路隆義  
文甲二ノ二 佐口 透

昭和十一年十二月七日印刷納本  
昭和十一年十二月十二日發行

第四百三十六號

### 【品 賣 非】

編輯兼發行者 密田 良二  
石川縣金澤市高岡町九十番地  
印刷者 高橋 覺吉  
石川縣金澤市高岡町九十番地  
印刷所 明治印刷株式會社

發行所

第四高等學校北辰會

THE  
LIBRARY  
OF THE  
MUSEUM OF  
COMPARATIVE ZOOLOGY  
AND  
ANATOMY  
OF THE  
MUSEUM OF  
COMPARATIVE ZOOLOGY  
AND  
ANATOMY  
OF THE  
MUSEUM OF  
COMPARATIVE ZOOLOGY  
AND  
ANATOMY